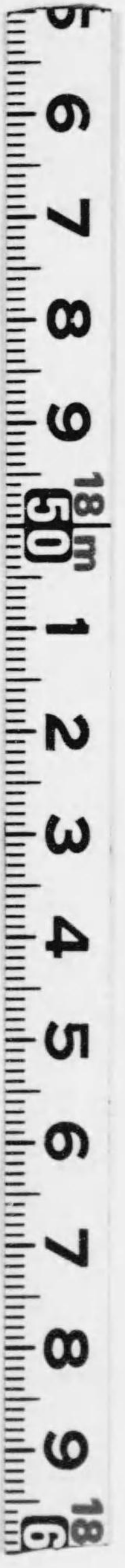
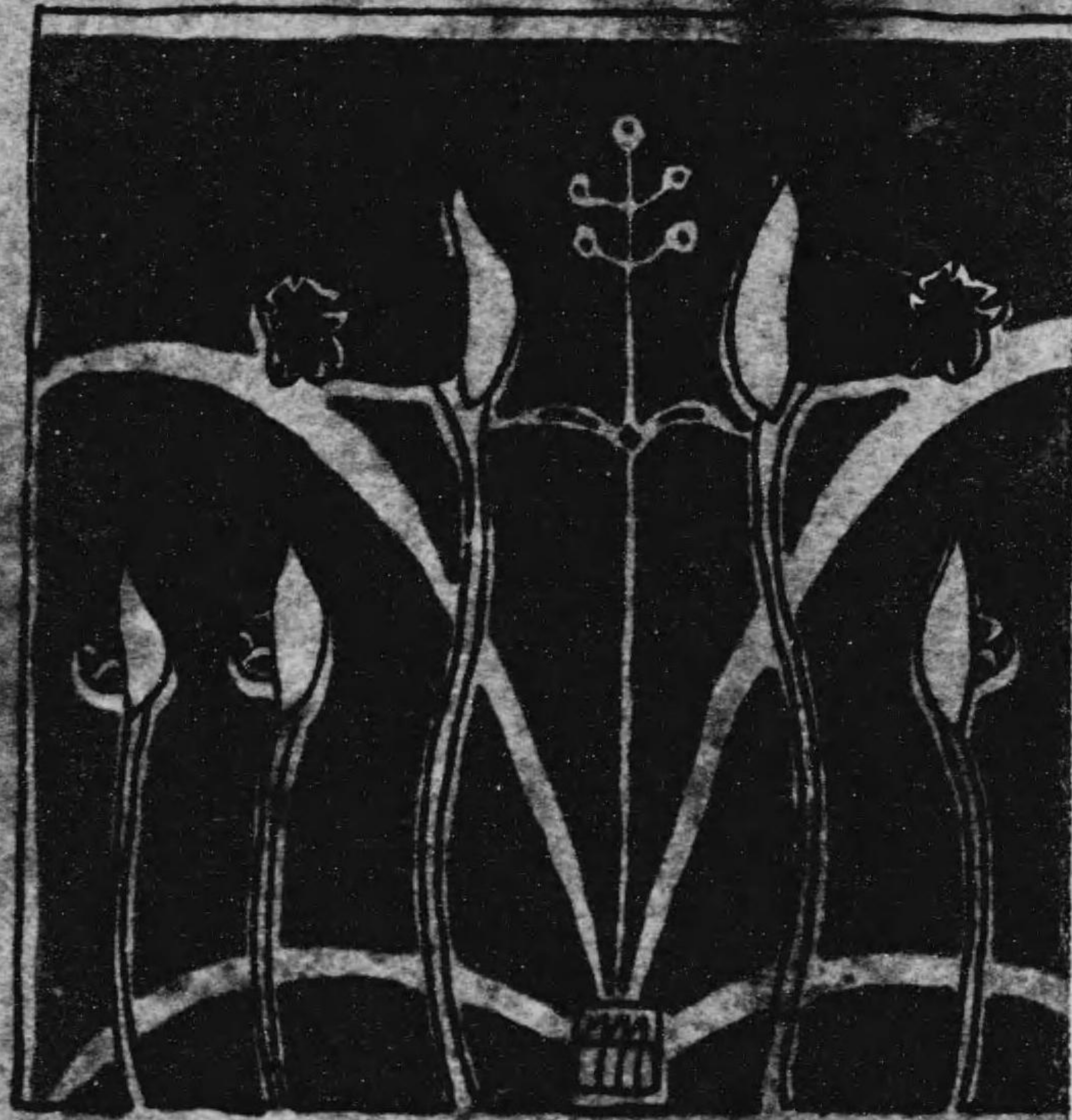


340
25



始





— 海外文藝叢書第四卷 —

三つの死

トストイ作
加能次郎譯

340-25

海外文藝叢書

第四篇

三つの死

トスルトイ作
加能作次郎譯



海外文藝社藏版

『海外文藝叢書』の發刊に就て

磯際に咲く薄紫の小草の花にも、大海の潮の香を嗅ぐことが出来る。海を戀ふる私達の心は、直ちに自由を思ひ、新しい天地を戀ふる心である。新しい天地に自分の身を見出して見たい、新しい日の光の下に花草の香を嗅いで見たい。

海を越えゆく旅人の上にも、私達は思を繋ぐ。海を越えて来る新しい藝術の花に、せめて心の宿りを求めて見たい。

黒づんだ舊い大地の面でも、新しい光で照して見れば、新生の萌芽が籠つてゐるに違ひない、新しい生命、新しい藝術の輸入は私達に命の糧を與へてくれる。

夙^{はや}業^すに來るべかりし新文藝輸入の時期は、今にして初めて私達の上に及んでゐる。決河の勢で私達の上に流れて注ぐ。この流れの勢を到るべき處まで到らせて見

たい。新しい命の泉を力強く溢れさせ度い。

名詞のみ徒らに喧傳せられて、實質の伴はなかつた缺陷を補ふべき時が初めて来た。新生の光りに、新天地の自由を、味ひ汲まんと思はるゝ人々の爲めに私達は、この美しい叢書を提供したいと思ふ。

大正二年五月

海外文藝社同人

はしがき

私は常々偉大な、何處を切つても生々した血が流れ出るやうな藝術を求めて居る。そしてさういふ藝術は矢張りさういふ偉大な人に求めねばならぬと思つて居る。近代の文壇でさういふ人を求めたら、先づトルストイなどは第一に指を屈せらるべきであらう。

トルストイの人物や思想や藝術やについて、茲に多少でも説明したくない。茲に簡単に言ふにはトルストイはあまりに偉大である。また一面からは私はトルストイに關して知る所の極めて少い者であるからである。それにも拘らず此の集を公にするといふことは非常に潜越なことではあるが、實はこれは私のトルストイ研究の第一歩だと自ら思ふて居るのである。

この小さな一巻は、トルストイ全體に比すると、大きな山の麓に生えた一莖の草にも譬ふべきであるかも知れない。併しそれは單なる根なし草ではない。その根は深く地心にまで達して居る。トルストイの他の大小すべての作と、脈を同じうし、流を共にする血が通うて居るものと信ずる。

此の集の巻頭に置いて、そして全體の標題とした『三ツの死』は、トルストイの多くの短篇中でも最も傑れた藝術品だといふことは、東西の評家の説の一致する所である。全く無條件の傑作であると私は信じて居る。「ゲーテの最も傑れた萬有神教的な作に比し得べき散文詩だ」といつた批評家もある。他の三篇は主として農民または下級民族の爲めに書いた、所謂「萬人に讀まるべき物語」である。トルストイ特有の所謂宗教味を帯びたものである。

よゝ人はトルストイの作は宗教臭くていけないといふ。一應尤もな評である。併

し同時に極めて淺薄な皮相な見解たるを免れない。吾々がよく之を味ふ時、さういふ宗教的臭味などに殆ど氣がつかない程に高い淨い藝術的香に充ち満ちて居る。否な殆どそれが藝術品だとさへ思はしめない程である。それ位その描かれたる事象が人生の實相でありその心理や運命が眞實である。而もその描寫の形式用語の純朴にして簡潔なること、寔に近代文藝の中で唯一獨特のものである。

何を書いてあるかといふことより進んで、どうして何故にそれが書かれたかといふことを考へるのは、藝術を味ふ上に大切なことである。トルストイの場合などに特に必要である。そこに人格がある、國がある、時代がある。

此の翻譯は『The Works of Tolstoj』と題する大形の英譯全集によつたが、ナザン・ハスケル・ドールといふ人の英譯に於ける、王冠のついた叢書をも參考した。只だ一つ『マルチン』は、後に至つて野上白川氏編纂の『英文近代文學』中に收められ

たものを不圖したことから見た所、前記二書よりその英譯が非常に異つて居ることを發見した。そしてその方が一層善く、一層分り易く譯してあるのを知つた。で多少それも参考としたが統一上大體前二書に依つた。

『三つの死』を除いた他の三篇は皆な英譯のそれとは題を異にした、即ち『隣人』は「火を忽にせよ、然らば擴がらん」であり、『マルチン』は「愛ある所神あり」であり、『人と土地』は「人はどれだけ土地を要するか」であつた。別に理由はない、只だあまり長すぎたり、口調が悪るかつたりした爲めであるに過ぎぬ。

大正二年九月

譯者 識

三つの死
① 隣人
オマルチン
人と土地

トルストイ作
加能作次郎譯

三つの死

秋であつた。

大街道を二臺の馬車が疾走して來た。前の馬車には二人の女が乗つて居た。一人は瘠せた蒼白い貴夫人であつた。今一人は其召使で、てかくした赤ら顔の、でぶく太つた女だつた。短い艶のない髪の毛の總が、色のさめた帽子の下からはみ出して居た。破れた手袋を穿

めた赤い手が、それを弾く様に後へ掻きやつた。毛織の肩掛に包まれた張り切つた胸は、健康な呼吸をして居た。その鋭い黒い眼は、或時は馬車の窓から、慌しく過ぎ去り来る野の景色を凝視め、或時は主人の上に降り、又或時は氣遣はしげに馬車の隅を見入つた。

婢の顔の前には、夫人のボンネットが帽掛からぶらさがつて居た。膝の上には狗が乗つて居た。兩足は床の上の荷物で持ち上げられて居るので、ごとん／＼とそれにぶつかると音が、車の弾金のきい々、いふ音や、窓のがた／＼いふ響の中にも聞かれる位であつた。

夫人は手を膝掛の上に置いて眼を閉ぢて居たが、背中を支へて居た褥の上に、弱々しく揺れて居た。そして微かに顔をしかめながら

咳を噛み殺さうとした。

彼女は白い寝帽子を被つて、青い首巻をしなやかな蒼白い首に巻いて居た。真直な線が、思ひ切り滑かな油をつけた鳶色の髪を二つに分けて、帽子の下にかくれて居た。そしてその廣い分れ目の所の皮膚の白さが、艶氣のない、死色を帯びて居た。しなびた、寧ろ青白い皮膚が、纖弱い可憐な面立の上にならんで居て、頬と頬骨が、猩紅熱で赤らんで居た。唇が乾いて顫動し、薄い眉は最早カーブがなくなつて居た。そしてその落ち込んだ胸の上に、旅行用の上衣が、真直な襜をつくつて居た。眼は閉ざされて居れど、その顔は、疲労と痲痺とそれから不斷の苦痛との印象を與へた。

従僕は馭者臺の上に、後に凭れて居睡をして居た。雇の馭者ははき／＼した聲で叫んで、四頭の勢の宜い汗みどろになつた馬を勵まして居た。そして時々、丁度その後にかくんで居る、蓋のない四輪馬車の馭者を見返した。車輪のタイヤは平坦な道を迅速に馳驅して、ねば／＼した大街道の泥路の上に、廣い並行の轍の跡を残した。

空は灰色で寒く、濕つぽい霧は、野にも山にも垂れ罩めつゝあつた。馬車の中は息づまる様で、香水の匂と塵の匂とがして居た。病人は頭を後にもたせながら、靜かに眼を見開いた。その大きな眼は輝いて居た。それは美しい黒い眼であつた。

「またッ！」と彼女は神経質らしく、美しい細い手で婢の外套の裾を突きのけながら言つた。それは時々彼女の脚にぶつかるのであつた。彼女の口は苦しげに引き締められた。

マトリオシアは両手で外套の裾を取り上げ、強健な足で立ち上つて、それから再びずつと離れて坐り直した。その生々した顔は眞紅の輝にみなぎつた。

病人の美しい黒い眼は、熱心に婢の動作に従つた。それから両手を以て席を擱んで少し身を高く揚げようと一生懸命になつたが、力が充分でなかつた。

再び彼女の口は固く締められた。そして顔全體が、甲斐なき、腹立たしき冷笑の表情を取つた。

『お前、一寸手傳つて呉れたつて……あゝ！ もう要らない。一人で出来るよ。お願いだから妾の背後にそんな枕なんか置かない様にだけ氣をつけてお呉れ、……全體、お前は觸らない方がよいんだよ、分らなかつたら！』

夫人は眼を閉ぢた。それからまた捷く臉をあげて婢を凝視めた。

マトリオシアは夫人を見やつて、赤い唇を嚙んだ。重い溜息が病人の口から洩れたが、その溜息は終らないで咳に代つて消えた。彼女は顔をしかめ、両手で胸をつかんで顔をそむけた。咳が止つた時もう一度眼を閉ぢて、ちつと動かずに座り續けた。馬車は村へ軋り入つた。マトリオシアはその肥えた手を肩掛の下から出して、そして

て十字の印をした。

『何だい？ 何か譯があるのかい？』と夫人は問うた。

『驛場でございます。夫人。』

『何故十字を切つたのだね？』

『教會がございます。夫人。』

病める夫人は窓の外を見た。そして今丁度その前を通つて居る、大きな、村の教會堂を見つめながら、靜かに十字を切り始めた。

二臺の馬車が一しよに驛場に止つた。病める女の夫と醫者とは自分等の馬車から降りて來て、夫人の乗つて居る馬車の側へ來た。

『氣分は如何です？』と醫者は彼女の脈を取りながら尋ねた。

『ね、お前さん、疲れはしないかね？』と夫はフランス語で尋ねた。
『外へ出たくはないかね？』

マトリオシアは包み物などを片寄せて、話の邪魔にならぬ様に隅
つこへ身を縮ませた。

『どうもありません、同じことです。妾出ますまい。』と病人は答へた。

夫は暫くそこに立つて居てから、驛舎へ行つた。マトリオシアは
馬車から飛び降りて、泥路を爪立て、横切つて構内へ入つた。

『妾が可憐さうだつて、あなたがたが朝御飯を喫がられない理由は
ありませんわ』と病める女は、馬車の側に立つて居る醫者に向つて、
かすかに弱々しく笑ひながら言つた。

『妾がどうあらうと、あの人達には何でもありやしない。』と醫者が
ゆるやかに彼女の側を離れ、驛舎の石段を走る様に上つて行つた時
に、女は獨語つた。『あの人達は達者だ、そして何時も同じことだ。
あゝ〜』

『どうでせう、エツアルド・イワノギツチ君、』と夫は醫者と出遇つた
時に手を揉みながら快活に笑つて、『私は旅行鞆を持つて来る様に命
命じたが、貴方はどうですか？』と言つた。

『それはいいですね。』と醫者は答へた。

『ところで、病人はどうでせう？』と夫は吐息をついて、聲を低め
眉を上げて尋ねた。

『今申した通り、モスコーまで行けないです。況して伊太利までは、殊にこんな天候では。』

『ぢや、どうしたらいいんです？ あゝ！ 困つた！』

彼は眼を手で蔽うた。……『こゝへよこせ。』と旅行鞆を持つて来た従僕を呼びかけて言ひ足した。

『何處か途中でとゞまらねばなりませんまい。』と醫者は肩を聳かして答へた。

『しかし、どうして出来るものですか？ 私はあらゆる言葉を盡して轉地を見合はさしようとするのでした。私共の財産のことも、後に残して置かねばならぬ子供のことも、それから私の仕事の都合

も、妻に話したので。ですが妻は一言も聞き入れません。妻はまるで達者で居るかなんぞの様に、自分で外國に住む計畫をしたのです。それなのに、若し私が妻に向つて眞實の容體を聞かせうものなら、それこそ妻を殺す様なものです。』

『さうです、夫人はもう死んでゐらつしやるんです。貴方もそれをよく御存じでせう、ヴァシリ・ディミトリッチさん。人間は肺がなく生きて居られもしませんし、またもう一度肺を作る方法もないです。それお悲しむべきことです。残酷です。けれどそれについてどう仕様がありますか？ 夫人の最後の日を出來るだけ安易にするのが私の仕事であり、またあなたの仕事です。今茲に必要なのは懺悔

僧です。』

『あゝ！一寸まあ思つても見て下さい。私が妻に向つて遺言させる様に言はねばならんなんていふ私の位置を。どんなことが起つてもいゝが、そればかりは言へない。おまけに妻はあの通り善良な女ですもの。』

「少くとも道が凍るまで待つ様に説いて見て下さい。」と醫者は意味ありげに頭を振つて、「途中で何事が起らないとも限りません。」と言つた。

『アクションシア、ようアクションシア！』と監督の娘が叫んだ。頭の

上から外套を振りかぶり、泥路を爪立て、歩きながら、「お出よ、ちよいと。シャーキンスカヤの夫人を見ようぢやないの、肺病でね、今外國へ連れて行くところださうよ。妾まだ肺病の人見たとがないわ。』

アクションシアは戸口から飛び下りて來た。そして二人の娘等は手を繋いで門の外へ走つて出た。小股に馬車の側へ歩み寄つて、低くされた窓をちつと覗き込んだ。中の患者は娘等の方へ頭をかしげたが、娘等のうそくした様子を見た時、眉を顰めて横を向いた。

『まゝあ！』と監督の娘は頭をきつく振つて言つた。……『まゝあ、どんなに容色がよかつたことでせう。そしてまゝ随分と變つたんでせうよね！まゝあ！見て？アクションシア。』

『え、見てよ、随分痩せてるのね!』とアクションシアは同じた。『側へ行つて、もう一ぺん見ませうよ。井戸へ行く様な振してね、あの、それ、顔を外向けたでせう、でも妾よく見られたわ。あんまり悪くないかしら? ねえ、マーシア。』

『悪いわ。でもなんて酷い泥なんだらう!』とマーシアは答へた。そして二人は門の内へ走り歸つた。

『妾が恐かつたに違ない。』と病人は思つた。

『だが妾達は急いで急いで外國へ行かなくてはならない。さうすりや妾はすぐ快くなるだらう。』

『あ、それで、どうだね?』と夫はまだ何か少しばかり口の中に入

れたまゝ馬車の側へ来て訊いた。

『いつも同じことばかり訊いて居る。』と病人は思つた。『そしてあの人は何か食べてるんだよ!』

『何もかよりはありませぬ。』と彼女は口の中で呟いた。

『ねえ、お前さん、斯ういふ天氣に旅行するのは益々悪くなるばかりだらうと案じて居るんだがね。エズアルド・イワノギツチ君も同じ様に言つてるよ。戻つた方がよくなからうか。』

女は腹立たしげな沈黙を守つて居た。

『その中に多分天氣も直るだらうし、道もよくならうし、そしてその方がお前さんの爲めにもよからう。さうすりや少くとも私達が皆

な一緒に掛けられるだらうし。』

『御免です、もしいつまでもあなたの言ふことをきいて居なかつたら今頃は伯林に居て、病氣もすつかり癒つて居たのでせうに。』

『どうも仕方がないぢやないか。ねえ、知つての通り、それは出来なかつたんだもの。併し今お前さんが一ヶ月も待てばそれだけお前に都合がいゝんだ。私は私の仕事を終へることが出来るし、そして子供も一緒に連れて行けもしようし。』

『子供は達者ですが、妻は病氣です。』

『だがまあ、一寸考へても御覽、もしこんな天氣にお前さんが途にでも悪くならうものなら……少くとも私達は家に居るべきだつた。』

『家に居て何になるんです……死ぬんですか、家で？』と病人は焦々して答へた。

併し死ぬといふ言葉は明かに彼女を愕かした。そして夫の方へ向き直つて、哀願する様な、伺ふ様な顔付をした。夫は眼を落して、何も言はなかつた。

病人の口は急に子供のする様に引き緊つた。涙が兩眼からほろ々々と流れた。夫は半巾で顔を掩うて、黙つて馬車から眼を轉じた。

『いえ、妻は行きます。』と病人は叫んだ。而して天を仰いで兩手をしかと握り合せてとりとめないことを呟き始めた。『あゝ神様！ 何故斯うなのでございます。』と言つた。涙は一層烈しく流れた。

彼女かのやは長い間熱心あひだれつしんに祈いのつた。けれども尙ほ胸むねの中うちには同じ緊縮きんしゆくと苦痛くつうとの感じかんじがあつた。空そらにも、野のにも、道みちにも、丁度ちやうど同じ灰色はひいろの陰鬱いんうつがあつた。丁度ちやうど同じ秋あきの霧きりが、前まへよりは濃こくもなく、淡うすくもなく、いつも同じく單調たんてうに立ち罩こめて居た。泥濘ぬかるみの大道たいだうにも、屋根やねの上うへにも、馬車ばしやの上うへにも、さては車くるまに油あぶらを注さしたり、手入ていれをしたりしながら、高たからかに快活くわいくわつな聲こゑで話はなして居る馭者等ぎよしやらの羊皮やうひの服ふくの上うへにも。

二

馬車ばしやの準備じゆんびは出来できて居たが、馭者ぎよしやは愚圖ぐづ々々くして居た。彼は馭者ぎよしや部屋べやへ行いつて居たのであつた。部屋べやの中なかは暖あたたかく、狭せまく、暗くらく、息いきづ

まる様やうで、職業柄しよくけがらの臭におひや、パンや、キャベツや、羊皮服やうひふくの臭におひなどがして居た。

數人すうにんの馭者ぎよしやが部屋べやの中なかに居た。飯焚めしたきは竈かまどの側そばに仕事しごとして居た。竈かまどの上うへには一人ひとりの病人びやうにんが羊皮ひつちに包つまれて寝ねて居た。

『フェオドル叔父おぢ！ おい！ フェオドル叔父おぢ。』と年若としわかな馭者ぎよしやで、帶おびに鞭むちを挿さした男をとこが部屋べやの中なかへ入はいつて來て、その病人びやうにんに呼び掛かけた。

『何なんだい？ がちちつき奴め。何なんだつてフェドヤを呼よんでるんだ？』と馭者ぎよしやの一人ひとりが訊たづねた。『手前てまえの馬車ばしやが待つまちてるぢやないか。』

『俺おらア、爺ぢいさんの靴くつを借かりていんだ。俺おれのがきれつちまつたから。』と若者わかものは髪かみの總よこを後うしろへかきやり、帶おびに挟はさんで居た手甲てつかよの皺しわをのぼし

ながら言つた。

『何だい？』弱い聲で言ふのが聞えか。そしてやつれた顔が竈の上でもち揚げられた。

廣い、瘦せた、血の氣のない毛だらけの手が、骨張つた肩を掩ふて居た汚れたシャツの上に、外套を引つ張つた。『何か飲むものを呉んねえ、兄弟。お前は何が要るのだい？』
若者は水の入つた小さな皿を渡した。

『ねえフエドヤさん、』彼は躊躇しながら言つた。『俺アね、お前さん今あの新しい靴が要らねいと思ふんだが、おれに貸して呉れねいか。多分お前さんもう要るまいよ。』

病人は力のない頭をぐつたりと塗物の椀の上へ落した。そして薄い垂れ下つた鼻髯を鳶色の水にひたして、力なく併し一心に飲んだ。
むしやくくと生えた顎髯がちいむさかつた。凹んだ、霞のかゝつた两眼を漸つと見開いて、若者の顔を見た。水を飲み了つた時、彼は濡れた唇を拭く爲めに手をあげようとしたが、その力がなかつたので、外套の袖で拭いた。黙つて、そして鼻でやつと呼吸をして、彼は真直に若者の眼を見入つた。そして力を集めようとした。

『お前さんは誰か外の者に與る約束でもしたのかねえ？』と若い馭者が言つた。『もしさうだつたら、それで可いのだ。困つたことには外がびちやくなんだ。それでもおれは仕事に行かなけりやならね

いし、そこでおれは獨りで合點したのさ。(おれはフェオドヤに靴を頼んで見よう、もうあの男は要らねいだらう)とね。だがお前さんも要るだらうね、——ねえおい……」

病人の胸の中に、何かぶつくと音がしかけて、そしてごろくと鳴つた。彼は體を曲げた。咳が咽喉の中にがらくくと鳴つて、呼吸がつまりかけた。

『何處に要るもんかね。』と不意に飯焚が話を取り上げて、腹立たしげに部屋中の者に斯う言ひかけた。『あの爺がもう竈の上から這ひ出さなくなつてから之れで二月だよ。まあちよいと見て御覽、もうすつかり參つて了つてるぢやないか? となにあの咳が胸の中を苦

しめるかお前さん方分らうがね。何處に靴なんか要るもんか。誰だつて新しい靴を穿かして埋めようとは思はないだらうよ! こんな罪なことを言つてもいゝ様になつたのは、ずつと前からだよ。それあんなに呼吸が塞まるぢやないか。もう外の部屋か何處かへ連れて行かなければならん。町に病院がある相だね。しかし、お前さん達は どういふ積かね? あの爺は部屋中を取つてるが、あんまりだよ。他には一寸空いた所はなし、それで居てお前さんたちはこゝを清潔にしとかにやならないし。』

『おいッ! セリョーハ來ないか、お客さんがお待ちかねだせ。』驛場の頭が戸口へ來て言つた。

セリヨーハは病人の返事を待たないで行かうと立ち上つた。が病人は咳をして居る間にも、返事をしようとして居るといふ風な眼付をして居た。

『お前靴を持つて行け、セリヨーハ。』と彼は咳を殺して少しばかり呼吸をつきながら言つた。『たゝな、いゝか、おいらが死んだら墓石を買つて呉れ。』と嘔がれ聲でつけ足した。

『有り難う、おちさん。ぢや持つて行くよ。それから墓石のことは——その、なんだ。一つ買つて上げようよ。』

『若い衆、お前さん達は證人だよ。』と病人ははつきりと言ひ得た。それからもう一度彼は身體を曲げた。呼吸がつまりかけた。

『よし／＼俺等聞いてたよ。』と馭者の一人が言つた。『ところでセリヨーハ。手前早く行け、でないと村長さんがまた探しに来るぜ。』

セリヨーハは手早く、役に立たぬぼろ靴を脱いで、腰掛の下へ投げ込んだ。フェオドルの新しい靴はきつちり彼の足に合つた。若い馭者は馬車へ行きながらも靴から眼を能う離さなかつた。

『へッ！ 馬鹿に素晴らしい靴だね！ こゝに靴油があらア。』と靴油の壺を持つた他の馭者が、セリヨーハが馭者臺に上つて手綱を取つた時に言つた。『ロハでかい？』

『羨しいんだね、さうだらう？』とセリヨーハは言つて、足をあげて外套の裾でそのまはりをはたかせた。

『それッ。』と鞭をあげて馬に合圖の聲をかけた。乗客、鞆、其他の荷物を積んだ二輛の馬車は、深い秋の霧に隠れて、ぬかるんだ道を速に駆け去つた。

夕方まで、その部屋には絶えず人が出たり入つたり、飯を食つたりすることが續いた。しかも病人は少しも氣づかれもしなかつた。夜に入らうとする時、飯焚は竈の上にあがつて、病人の足元から羊皮の上衣を取り去つた。

『怒つてお呉れなよ、ナスタスヤ、おれはもう直き此の部屋には居ないよ。』

『いゝともく、何でもないことよ。』と飯焚の女は呟いた。『だがお

前さん如何したのだね。よう？』

『おれの肚の中はすつかり噛み盡されて了つた。それが何といふことだか、誰に分るもんか！』

『お前さんそんなに咳をすると、咽喉が痛いに違ないわね。』

『もう痛いのを通り越した。死は手の届所へ来て居る。おれの言つたのはその事だ。コッホ！ コッホ！ コッホ！』と病人は呻吟した。

『さあ斯うして足にお掛け。』とナスタスヤが言つて、外套を彼が着れる様に氣持よく整へて、それから竈から下りて行つた。

夜の間、部屋は小さな蠟燭で幽かに照されて居た。ナスタスヤと十二三人餘りの馭者等は、床の上腰掛の上に、高い鼻をかきながら、

眠つて居た。病人のみは只一人、弱々しく痰を吐いたり、咳をした
りして、竈の上に身悶して居た。

朝になつて彼から何の音も聞えなかつた。

『昨夜變な夢を見たよ。』と翌くる朝まだ薄明りの時分、飯焚の女は
伸びをしながら言つた。『何でもフェオドル爺がね、竈の上から下り
て来てさ、薪を切りに出掛けるのを見た様だつた。』さあ、おれはお
前の手傳してやるぞ、ナスタスヤ。』と言ふからね、妾が『どうしてお
前さんに薪が切れるもんか』つて言ふのさ。けどね、鉞を持つて、
それはまあ素敵に早く、木片のとぶのしが見えぬ位早く切り始めた
んさ。』まあ、お前さん病氣ちやなかつたの！』と言ふと、——『い、

や、健康だ、』と言つて、斧を振り上げようとしたので、妾まあびつ
くらしして聲を立てたら眼が覺めちやつた。まさか死んでることはな
いだらうが、さうだらうね？——フェオドル叔父さん！よう、叔
父さん！』

フェオドルは動かなかつた。

『まさか死んでることはないよ。なア？ 行つて見ておいでよ。』と
丁度今眼をさました馭者の一人が言つた。

赤い毛だらけの瘦せこけた手が、竈の上からぶらさがつて居たが、
冷たく蒼白くなつて居た。

『監督さんの所へ行つて言つてお出よ。死んだらしいせ。』とその馭

者が言つた。

フェオドルには一人の親類もなかつた。彼は外國人であつた。次の日人々は彼を並木の後方の墓地に埋葬した。そしてナスタスヤは幾日も幾日も、自分の見た夢のことや、フェオドルの死んだのを第一番に見つけたのが自分であつたことを、誰にもかにも話させられた。

三

もう春が来て居つた。

市の濕つた街路に沿うて、速い細流が、汚物を蔽ふた氷の隙目をさらりと流れて居る。明るいは人々の衣服と彼等が町を急ぎつ

歩きながらの話の調子であつた。土塀をめぐらした庭園の中には木の芽が盛にふいて居て、新鮮な微風が、柔い穏かな吐きを立て、樹々の梢をゆるがして居る。至る所透명한露の玉が結んでは滴つて居る……

雀は只だわけもなく囀つて、小さな翼を羽ばたかせて飛び廻つて居た。日當りのよい所、壁といはず、家といはず、木といはず、すべて生命と光輝とに充ちて居た。天も地も人の心も、皆な青春と歡樂とに溢れて居た。

或る主なる街の大きな領主の館の前には、新しい麥藁が積まれてあつた。家の中には、かの外國への旅に急ぎつゝあつた瀕死の患者

が寝て居る。

彼女の病室の閉された戸の近くに、彼女の夫と、同じ位の年輩の一人の婦人が立つて居た。長椅子の上には懺悔を聞く僧侶が眼を落して、法衣の下に何か包んだ物を持つて座つて居た。片方の隅のヴオルテア式安樂椅子の上には、病婦の母なる老婦人が凭れかゝつてさめぐと泣いて居た。

その傍には婢が立つて居た。何時でも、老女の要求に間に合ふ様に、清潔な半巾を持つて居た。今一人の婢は、老女の顚顚をさすつたり、帽子の下の彼女の灰色になつた頭をはいたりして居た。

『さあ、ではどうぞ、あなた。』と男は、戸の側に彼と一緒に立つて

居た年上らしい女に言つた。『妻は非常にあなたを信頼して居ます。

貴方ならばお話のなさりようもあります。どうか暫く話してやつて下さい。ねえ、どうぞ行らつしつて下さい！』

彼は女のために戸を開かうとした。けれど彼の従姉はそれを止めた。幾度も半巾で眼を拭き、そして頭をふりながら。

『さあ、これで私が泣いてたことに気がつきますまい。』と女は言つた。そして自分で戸を開けて病人の側へ寄つた。

夫は此上もなく昂奮して全く氣の狂つた様に見えた。彼は老母の側へ飛んで行きかけた。が二三歩の後、あたりを見まはし、部屋中を歩いて、それから僧侶の所に近寄つた。

僧侶は彼を見上げた。彼は天を仰いで大息した。濃い灰色の髯もまた上に向けられ、再びもとの通にかへつた。

『あゝ神よ神よ！』と夫は言つた。

『どう仕様がありますか？』と懺悔僧は叫んだ。そして長大息をついて又額と髯とを上に向けた。そしてそれを落した。

『そこに年老つた母が！』と夫は殆ど絶望的に叫んだ。『母は我慢が出来ますまい。ねえ、母はそれはく非常に妻を愛して居なかつた。それはもう……あゝ私は知らない。貴僧、どうか母の氣を少し落ちつかせて下さい。そして此室を出て行かれる様に説き勧めて見て下さい。』

懺悔僧は立ち上つて老婦人の所へ行つた。

『御尤です、誰でも母親の方のお心を解することは出来ません。』と彼は言つた。『けれども神様は慈悲深うございます。』

老婦人の顔は忽ち痙攣つた。そしてヒステリックな獻馱が彼女の五體を慄はした。

『神様は慈悲深うございます。』と僧は彼女がいくらか沈着いて来た時に繰り返した。『お聞き下さい、愚僧の教区内に一人の病人が居りました。マリヤ・ディミトリエヅナさんよりもずつと悪るかつたのです。そしてその男はほんの小商人でありましたが、或る藥草を喫んで極く暫くの間癒りました。現にその男は今モスコに居りま

す。愚僧はその男の話をヴシリイ・ディミトリキッチさんにも話しました。もう試して御覽なされたかも知れません。が、兎に角それは御病人を満足させるだらうと思ひます。神様と一緒にならば、何事も可能です。』

『いえ、あの女は善くなりますまい。』と老女は言ひ張つた。『何故神様は彼の女を御召しになるのでせう？ この妾を召されないで。』

斯ういつて再び彼女はヒステリカルなる戯戯に襲はれた。それは絶え入るばかり烈しかった。

病人の夫は両手で顔を掩ふた。そして部屋を飛び出して行つた。

廊下に出ると先づ出會つたのは六つになる男の兒であつた。彼は

精一ばい出して小さな妹を追ひ廻して居るのであつた。

『旦那様、お子達をお母様の所へお連れ申してもようございませうか。』と乳母が訊いた。

『いけない。子供に會へないのだ。子供は邪魔するから。』

男の兒は暫く止つて、一心に父親の顔を見つめて居た後で、足で悪戯をやつて、樂しげに騒ぎながら走り廻つた。

『僕ね、今馬乗してるんだ。お父ちゃん。』と小兒は妹を指して言つた。

斯かる間に部屋の中では、従姉は病人の傍に席を取つて、病人をして自然と死を思はせる様に巧にだん／＼と話をその方へ持つて

行きつゝあつた。醫者は窓際に立つて薬を調合して居た。

病人は白い上着を被て、蒲團に身のまはりを取りまいて、寢臺の上座つたまゝ黙つて従姉を見て居た。

『あゝ姉さん！』と彼女は不意に叫んで従姉の話を遮つた。『死ぬ準備なんかさせようとししないで下さい。妾を子供扱にししないで下さい！ 妾はキリスト信者です。そのことは能く知つて居ます。妾はもう長くないことは知つて居ます。良人がもつと早く氣をつけて呉れたら、妾は伊太利に行つて居たんです。そして大概、然うです恐らく、今時分までには快くなつて居たでせうに。皆良人にさう言つたのです。ですが何うなるもんですか、みんな神様の思召です。吾

々人間は皆罪を犯しました。妾はそれを知つて居ます。けれど、何事も許されるでせう。許さるべき筈だと、妾は神の恵を望んで居るのです。妾は妾の心をじやうぶにする様にして居ます。妾もまた多くの罪を犯しました。ねえ、姉さん、けれど、どれほどその贖罪の爲めに苦しんだでせう！ 妾は忍耐して苦みに堪へようと努めました。……』

『では牧師さんに來て頂きませうか、ねえ？それが貴女の爲めにお樂でせう、さう覺悟なさつた上は。ねえ。』と従姉が言つた。

病人は承諾のしるしに頭を垂れた。

『あゝ神よ、罪ある妾を、許して下さい！』と彼女は呟いた。

從姉は出て行つた。そして懺悔僧を招いた。

『彼女は天女のやうです。』と從姉は涙を浮べて病人の夫に言つた。

夫は泣いた。牧師は病室へ行つた。老女は尚ほ正氣を失つて居た。

室内は殊の外静寂であつた。五分間の後懺悔僧は出て來た。そして

法衣を脱いで髪を撫でた。

『難有いことに、夫人は前よりは落着かれました。あなた方にお目

にかゝりたいやうです。』と言つた。

從姉と夫とは病室に入りつた。病人は静かに泣きながら、神の像

を凝視して居た。

『まあ、結構だ。』と夫は言つた。

『有り難うございます。今はまあ何といふいゝ氣分でせう！ 何と

も言はれぬ喜びを感じます！』と彼女は言つた。幽かな微笑が薄い

唇の上に浮んだ。『何と神様は慈悲深いことでせう！ ねえ？ 神

様は慈悲深くて全能です！』

斯う言つて再び涙を堪へた眼で聖像を見上げて、熱心な祈禱を捧

げた。

その時突然彼女の心中に何事が起つたらしかつた。と彼女は夫を

招いた。

『貴郎は決して妾の望をかなへて下さる氣がないんです。』と弱い不

平らしい聲で言つた。

夫は首を伸して柔順に聞いて居た。

『どうしたと言ふのかね?』

『妾はこんな醫者達は何にも知らないんですつて何程貴郎に言つたか知れないでせう! 手輕な女醫が居るんです。その女醫達が療治します。あの牧師さんが言つたのはそのことです。……商人が……その人を呼びにやつて下さい。……』

『誰をかい? これ。』

『まあ! 貴郎妾の言ふことが解らないのね。』斯う言つて死に瀕せる女は眉を擡めた。そして眼をつぶつた。

醫者が來て病人の手を取つた。脈搏は益々微弱になつて行くのが

明かであつた。醫者は夫に合圖をした。病人は此の身振を認め、驚いて四邊を見廻した。従姉は涙をかくす爲めに顔を外向けた。

『泣かないで下さい。妾の爲めにどうか心を痛めないで下さい。』と病人は言つた。『泣いて下さると妾は最後の慰籍を奪はれます。』

『あなたは天女です!』と従姉は彼女の手に接吻した。

『いえ、こゝを接吻して下さい。誰も彼も死人の手を接吻するばかりですわね。あゝ神よ! 神よ!』

その日の夕方には、彼女は死骸であつた。そして棺に納れられた死骸は、大きな館の廣間に横へられた。廣大な部屋には、その戸が悉く閉されて、役僧が單調な聲で、ダギテの詩篇を鼻にかけて誦

して居た。

高い銀の燭臺の上の蠟燭の火が、死人の白い額の上にも、重く蠟を塗つた手の上にも、膝や足にもくしい慰安を與へて居る蠟衣の硬い襪の上にも、ぎら／＼した光を投げた。

僧侶は音調を變へずに克明に誦し續けた。そして死の部屋の沈黙の中に、彼の聲は響き渡つては消えて行つた。時々遠くの部屋から、子供の跳ね廻る聲が聞えた。

『なんぢ面をおほひたまへば彼等はあわてふためく、汝かれらの氣息をとりたまへばかれらは死して塵にかへる。

『なんぢ靈をいだしたまへば百物みな造らる。なんぢ地のおも

てを新にしたまふ。

『願はくばエホバの榮光とこしへにあらんことを、』……………

死人の顔は嚴肅で崇高であつた。けれどもあの純潔な冷たい額も、固く結んだ唇も動かなかつた。彼女は注意の權化だつた！ けれど果して今やこれらの崇高な言葉を解したか？

四

一ヶ月の末に彼女の塚の上に石の禮拜堂が建てられた。かの馭者の上にはまだ墓石がなかつた。たゞその塚の上には、新しい緑の草が生えたのみである。この塚こそ、彼が人間として彼の過去の存在

の唯一な記録なのである。

『セリョーハ、お前さん罪だし、また耻だらうよ。』と或日驛場の飯焚が言つた。『フェオドルに墓石を買つてやらないと。お前さん（冬に冬に）つて言ひくしてたぢやないか、何故今約束を守らないのかい？ あたし皆聞いてたよ。あの親爺さんはお前、お前さんが何故それをしないかつて、もうはや、一度訊きに來て行つたよ。お前さん買つてやらないと、もう一度出て來て取つつくぞ。』

『おい、これ、己はしないと言つたかい？』とセリョーハは言ひ張つた。『己は今買つてやらうとして居るんだ。言つた通りするよ。今に一ループル半手に入るんだ。おれは忘れては居ない。今度町へ行く

様なことがあつたら、そしたら買つて來ようよ。』

『手前、せめて十字架でも建て、やらなくちや。そりや手前のしなぐちやならねえこつた。』と一人の年老つた馭者が言つた。『全くいけないや、今でも手前、あの靴を穿いてるぢねえか。』

『さうだ。だが何處からおれは十字架を持つて來れるかい、まさか古い棒切にでも拵へると言ふんでもあるめい。さうだらう？』

『手前何を言ふんだ？ 棒切で拵へるつて？ さうぢやないよ。斧を持つて、いつもより少し早く森へ行くこつた。さうすりや伐つて來れるわ。小さな秦皮の木を伐りやそれで出來るんだ。荒木の十字架が。手前が森へ行つた所で番人にウオッカの一杯も飲まさねばなら

ねいことはあるめい。誰だつて一寸したこと位に酒をのますことは
妻らねいからな。なんだ、昨日おら車の心棒を折つたんで、青々し
た森で、一本新しいやつを伐つて来ちやつたが、たあれも何とも言
やしねえ。」

次の朝早く、まだ夜も明けぬうちに、セリョーハは斧を持って森へ
出かけて行つた。

萬物 悉く冷たい、死んだ様な、まだ太陽の光に觸れない、霧の幕
に包まれ居た。

東の空は次第々々に明るくなつて來た。そしてまだ軽い雲に掩は
れた穹窿の上にそのほの白い光を反射して居た。一片の草の葉尖

も、梢頭の葉の一片も、そよとも動かない。只だ聞えるものは、時
々森の中に小鳥の羽ばたく音か、さなくば森の沈黙を破つて、地上
に擦れ合ふ微かな物の音のみである。

突然異様の響、此の自然には珍らしい物の響が、反響して森の端
に消え去つた。再びその物音が響いた。幾度も幾度も單調に繰り返
された。古い動きもやらぬ一本の太木の根に當つて。樹頭は常なら
ぬ様子に震ひ出した。滴るばかりの木の葉は何事か吐き始めた。梢
にとまつて居た小鳥は二三度けたましく聲を放つて飛んで行つ
た。

斧の音は益々繁く鳴り響いた、生々しい汗氣の多い本片が露つぽ

い草の上くさの上へに散らばつた。みし／＼と微かな音かすかなおとが斧おのを打つ音うたの下から聞えた。

樹はその全身を慄おそはした。且つよろめき、且つ速すみやかに立ち直り、其の根元の危あやうきを氣遣きづかうて戰慄みふるおした。

一瞬の間しんとした。と今一度樹は傾いた。パツリと幹の裂ける音が聞えた。そして草木の繁しげみを裂き破やぶつて、濕しめつた地上ちじやうに轟然かうぜんと倒れ込んだ。

小鳥はけた／＼ましく叫んで更に高く飛び上つた。飛び上りざまに軽く觸れた小枝は、瞬時の間震へて居たが、やがて他の樹々の枝の如くに靜肅せいじゆくに返つた。

樹々は、かれらの真中に作られた新しい空間の上に、前よりは一層喜ばしげに、その靜かな枝を高く擡げた。

旭の第一線が雲を破つて空に輝いた。そして地をも天をも照した。

霧は大波をなして谷に漂ひ始めた。露は緑の葉の上に踊つて居る。清せいめい明めいな白雲は、その天路を走つた。

鳥は深い森の中をとび廻つた。そして恰も氣も狂ふばかりに彼等の幸福を歌つた。滴る様な樹々の葉は、喜ばしげに、また満足氣まんぞくけに高く梢頭せうとうに囁いた。生ける樹の枝は、緩やかに、また崇嚴そうげんに、死んで倒れた樹の上に搖いだ。

隣 人

イワン・セルバコフは百姓で、田舎に住んで居た。彼は何不足なく暮して居た。身體は頗る達者で、村中での働き者で、三人の成長した息子を持つて居た。一人は結婚し、一人は婚約が整つて居り、今一人は丁度これから耕作に役に立ちかけて居る位の少年であつた。彼の年取つた妻のイワノヅアは伶俐な女で、且つ善良な家婦であり、嫁はおとなしい勤勉家であつた。イワンはその家族と一緒に愉快に

安樂に暮して居た。たつた一人、この家庭で遊んで食べて居るものは彼の老いたる病身の父であつた。父は喘息で六年の間竈爐の上に寐て居るのである。イワンは何でも澤山に有つて居つた。三頭の馬と一頭の仔馬、一頭の牝牛と一頭の犢、それから十五匹の羊をもつて居た。女等は彼等の夫の衣服の修繕をするばかりでなく、その裁ち縫ひもした。又野に出て働きもした。古い穀物は新しいものが穫れるまでもあつた。彼等は燕麥の收穫で税金も拂ひ、すべての必要に充てた。イワンはその子供とも愉快に暮して居た。

ところが隣にガヴリロといふ男が住んで居た。跛で、ゴルディエ、イワノフの息子である。さうしてその男とイワンとの間に喧嘩が

起つた。

老ゴルディエが生きて居た間、またイワンの父が家を支配して居た間、この百姓達は、模範的の近所同志の様に暮して居た。女達が篩や桶が要つたり、男達が仕事着が要つたり、車を借らねばならなかつたりすると、彼等はこちらの庭からあちらの庭へ送るといふ風にお互に用を辨じ合つた。もし、仔馬が穀物場へ入り込んで来ると、彼等はそれを追ひ出して、そしてたゞ、『氣を注げて呉れよ、二度と入らぬ様にしてお呉れ、己達はまた穀物を片附けてないんだから。』とばかり言ふのを常とした。けれども穀物場や物置の中へ物を隠すとか、仕舞ひ込むとか、或は喧嘩するとか、かういふことは決して起

らなかつた。

斯様にして彼等は、老年の人達の生きて居た間やつて来た。けれども次の時代の人々が支配する様になると、物事が新しく變つて来た。

一切の悶着は些細なことから起つた。

イワンの息子の嫁の小さな牝鶏が、その季節に早く卵を産みかゝつた。若い嫁は復活祭の爲めの卵を集め始めた。毎日彼女は物置の中の箱車へ卵を取りに行つた。ところが子供等の仕業らしいが、牝鶏をおどかしたので、牝鶏は垣を越えて隣の庭へ飛び込み、そこに産み始めた。若い女はその小さな牝鶏のコッコと鳴く聲を聞いた。

彼女は獨語を言つた。

『私は今暇がない。休日の用意に小舎を掃除しなくちやならん、後で行つて取つて来よう。』

夕方になつて彼女は物置へ行つた。箱車へ。が卵の影もなかつた。若い嫁は姑や義弟に、もし彼等が取りはしなかつたかと尋ねた。

『いゝや、己達は取らない。』と彼等は言ふ。

併し一番年若の義弟が言つた。

『あなたの鶏はね、隣の庭に卵を産んでた、そこでクツクツ鳴いてたが、そこから飛んで歸つた。』

そこで若い女は彼女の牝雞を看に行つた。牝雞は棲木の上に幼雞の隣に坐つて居た。その眼はすでに閉ぢられて、丁度眠りかゝつて居た。もし牝雞が答へることが出来さへするならば、嫁は牝雞が何處に卵を産んで居たかと尋ねたでもあらう。

で若い女は隣の家へ行つた。年取つた女が戸口に出て來た。

「何か用？　ねえさん。」

「えい、おばあさん、私の牝雞がね、今日お宅の庭へ飛んで行つたんですがね、もしや卵を産んでなかつたかしら？」

「一寸も見なかつたよ。家の牝雞が大分前から産んでますよ。家では家の卵を集めたけれど、他人のなんか取る用がないんだよ。私達

はね、ねえさん、決して他人様の庭へなんぞ卵を取りに行きやしないからね。」

これは若い女にとつて侮辱であつた。で彼女は一言言ひ過ぎた。隣の婆さんはそれに應じて答をした。そして彼等はお互に罵り合つた。イワンの妻君は水汲に出て來た。そして彼女もまた仲間入した。ガヅリロの妻君も部屋から飛び出して來て隣の人達を罵つた。彼女は以前あつたことを引合に出したり、それにないことまで尾鱗をつけ加へたりした。お定りの口論が次いで起つた。

皆が一時に叫び出した、そして一度に二事を言はうとした。さうだ、そしてその言葉はみな悪口であつた。「貴様はこんなく、――」

『貴様は他の』——『盜賊。』——『淫婦奴。』——『貴様は貴様の義父を乾干にしやがった。』——『獸め。』

『貴様、卑しい乞食めが、貴様はおれとこの篩に穴あけやがった！』

——『貴様は家のバケツの柄を持つて行きやがった。それを返せ。』
彼等はバケツの柄を掴み合つた。そして水を零した。互に肩掛を取り合つて、そして喧嘩を始めた。

丁度そこへガヴリロが野から歸つて入つて來た。そして自分の妻君に味方した。イワンと息子とか飛び込んで來て、そこでみんなが一しよくに取つ組み合つた。イワンは力強い百姓だったので、みんなを彼方此方へと投げつけた。彼はガヴリロの頬髯を一掴み引き

ちぎつた。群衆が寄り集つて來た。が彼等を引き分けることは困難であつた。

それが事の始りであつた。

ガヴリロは抜かれた髯を白紙に包んで、そして地方の裁判官に訴へて出た。

『私はあのワシカの畜生に引き抜かすのに髯を生やしたんぢやありません。』と彼は言つた。

そして彼の妻は隣の人々に、今に裁判所からイワンを召び出して訊問するだらう、そしてシベリアへ送るだらうと言ひくして居た。かやうにして喧嘩は續いて行つた。

窯爐ストーヴの上に寝て居た所の老人は、その極く最初の日から、彼等を和めようとした。併し若い連中は聞かうともしなかつた。老人は彼等に言つた。――

『子供等、お前等は馬鹿なことをやつてるよ。何もかも馬鹿げたつまらぬことから起つたんだ。考へて見ろ、根が一つの卵からぢやないか！ かりに子供等がその卵を取つて了つたとして見ろ。えい、それで可いちやないか。卵一個が何だい。神様は皆にいくらでも下さる。まあ、よしんば隣の婆さんが悪口を言つたとした所でだ、お前等がそれを直してやるべきだつたんだ、もつと綺麗な言ひ方をする様に教へてやらねばならなかつたんだ。ところでお前等はもう喧

嘩しちやつた――人間はみんな罪の深いもんだ！ それでこんなことが起るんだ。行つて仲直して来い、さうすりや何にもかも忘れられて了ふんだ！ しかし、もしもお前等が腹立まぎれにやると、物事はお前等の爲めに益々悪くならうよ。』

若い連中は耳を傾けなかつた。彼等は老人が嚙語を言つてるのだ。誰でも老人にあり勝な様に、たゞぶつ／＼言つてるに過ぎないと思つた。

イワンは隣の者に負けては居なかつた。

『おれは彼奴の髭を抜いたんぢやねえ、あいつが自分でやつたんだ、あのどら息子奴がおれの眼鉤を滅茶々にしやがつた。それからお

れのシャツを破りやがった。ちよつとこれを見い！」

それからイワンも亦た裁判所に行つた。事件は長官の前にも地方裁判所にも審問された。彼等が訴訟をやつて居る間に、ガヴリロの荷車の心棒が見えなくなつた。ガヴリロの家の女共は、イワンの息子がそれを盗んだのだと罪を被せた。

「私達はいつが夜中に窓の側に行くのを見た。荷車のある所へ行く途中を。それから、あいつが居酒屋へ入つて、その主人にその心棒を賣らうとして居たつて誰か言つたよ。」

で、もう一つ訴訟が始まつた。そして家では毎日、新しい喧嘩、新しい争があつた。小さな小供同志も、大人の眞似して喧嘩した。

女共は、互に川などに出會ふ様な時には、鋤頭で仕事をするよりも、舌頭でべちや／＼言ふ方が多かつた。そして萬事が善く行かなかつた。

最初のうちはこの百姓等は只だお互に悪口の言ひ合をしたのみであつたが、時が経つに従つて、彼等は實際にそこらにあるものは何でも盗み出した。そして女や子供もまた同じ事を見習つた。彼等の生活は益々悪く悪くなつて行つた。

イワン・セルバコフと跛のガヴリロとは、役場でも裁判所でも、仲裁人の前にも、係の判事が誰も彼も飽きるまで事件を争つた。ガヴリロはイワンに罰金を課し、牢屋に入れようと欲した。イワンはま

たイワンでガヴリロに同じことを欲した。さうしてお互に害を加へれば加へるほど益々お互に怒つた。犬が喧嘩をする時に、彼等がお互に噛み合へば噛み合ふほど益々自暴になるものである。もし誰かが後から犬を打つと、犬はそれを相手の犬が噛んでるのだと思ひ、それで益々狂氣じみて来るものである。この百姓等は恰度そんな工合であつた。彼等はその訴訟事件をもつてその上その上へと進んで行つた。どちらか一方が他を罰金か禁錮かによつて他を罰せしめんと欲した。そしてそんなこんなで彼等の心は益々大なる憎しみを以て充たされた。

『今に見ろ！ 復讐してやるから！』

斯様にして彼等は六年の間事件を引つ張つて歩いた。窯爐の上の老人は尙ほ同じことを言ひ續けて居た。彼は皆に始終道理を説いて聞かせうとした。

『子供等や、お前等は何をしてるだい？ そんなことはみんな廢めつちまへ、仕事を放擲らかすなよ、恨を持てはならん。その方が餘つ程よからう。お前等が腹立てると立てるほど事が悪くなるばかりだからな。』

けれど尙ほ彼等はこの老人の言に注意を拂はなかつた。

七年目になつて次の様なことが起つた。或る婚禮の席上で、イワンの息子の嫁が衆人の前でガヴリロを辱かした。彼女は馬盜賊だ

とガヴリロを罵つた。ガヴリロは酔つて居た。彼は自分を制するこ
とが出来ないで女を擲つた。彼は女が満一週間床に就いた程酷く打
擲した。ところが女は柔弱な身體であつたのだ。イワンはこれ幸だ
と喜び、早速警察官へ訴へて出た。

『今度こそは、あいつをやつつけるぞ、監獄かシベリアか、どつち
か免れさせしねいぞ。』と彼は獨語を言つた。

併しまたイワンは敗けた。警察官は彼の訴願を受付けなかつた。
女の方が檢べられた。彼女が床を離れた時、少しも打擲された痕が
なかつた。イワンは治安裁判官へ持つて出た。すると判事はその事
件を地方の裁判所へ移した。イワンは法官を大に困らせた。彼は書

記や長老等と共に糖蜜水をしたゝか飲んで酔拂つて行つたのであ
る。そして彼はガヴリロを笞刑に處せしむることに成功した。法廷
に於てガヴリロに對する宣告が讀み上げられた。書記がそれを讀ん
だ――

『當法廷は百姓ガヴリロ・ゴルヂエーフが係官の面前に於て鞭笞二十
の刑を受くべきことを決す。』

イワンも亦たその宣告を聞いて居た。そしてガヴリロを見やつて
言つた。――『さあ、奴さんどうするだらう？』ガヴリロはこの宣告
を聞いて白布の如く顔が白くなつた。あたりを見廻して次の室へ出
て行つた。イワンもそれに續いた、そして自分の馬の居る所へ行つ

た。が彼はガヴリロが次の様に言ふのを聞いた。

『よろしい、彼奴は俺の脊中を打たう、俺の背中が焼ける様にならう。だが見て居れ、あいつのものはもつと焼けやうが悪うからうせ。』

イワンは之を聞いて、早速判事の所へ行つて言つた。

『もし判事様、ガヴリロは私の家を焼くつて嚇かしました。お聞き下さい、證人の前で言ひました。』

ガヴリロは喚び返された。

『さう言つたのは實際か？』

『私は何も言ひません、私を打つて下さい。その力がおありなので』

すから。何だか私が正當であつても、罰せられるのは私一人きりの様ですね。だが此奴は何か出来る様に許されてるんです。』

ガヴリロはまだ何か言ひたかつたのだが、彼の唇と頬が慄へ出した。そして彼は仕切の壁の方へ顔を向けた。判事達さへもガヴリロの顔を見た時に怖を抱いた。『まあ、實際に彼がその隣人か又は彼自身に對して何か禍を企てるとしたらどうだらう？』と彼等は思つた。そこで小さな老年の判事は言ひ出した。――

『どうだ、お前等？』もう一度仲直して友達になる様にした方がよからう。なあ、ガヴリロ、お前は妊娠の婦人を殴つてそれで善かつたのか？ 何事もなくて済んだのが、ほんとにお前には幸福なんだ。

もしさうでなかつたら、お前はどんな罪を犯したと思ふ？ それ
正当であつたか？ えい、懺悔して此男に許して貰へ、此男はお前
を許して呉れるだらう。さうしたら判決を變更してやらう。』

書記が之を聞いた時に、『それはなりません。何となれば、第百十
七條によりますといふと、何等穩便な解決のしようがなかつたので
すから。判事の判決が宣告されました。ですからその判決は執行さ
れねばなりません。』と言つた。

併し判事は書記の言ふことに注意しなかつた。

『よろしい……お黙りなさい！ ねえお前、たゞ一箇條ある、そし
てそれが第一條だ。神を記憶せよと。而して神はお前等に和睦する

様に命せられた。』

といつて判事は再び百姓等を説き勧めようとした。けれどそれ
は無駄であつた。ガヴリロは彼の言葉を注意しなかつた。

『私はもう殆ど五十になります。私はもう嫁取つた息子を持つて居
りますが、まだこれまで一度だつて私は打たれたことはありません。
ですが今此の因業なワンカ奴が私が鞭たれる様になりました。それだ
のに私が彼奴に赦して貰はねばなりませんか、ねえ？ なアによ
うございます！ まあワンカに用心しといて貰ひませう！』

ガヴリロの聲は再び慄へた。彼は最早言ひ得なかつた。彼はあ
たを見廻して出て行つた。

裁判所から家まで十ヴェルストばかりあつた。イワンが家に着いた時にはもう遅かつた。女共はすでに家畜を連れに行つて居た。彼は馬具を解いて、物を片附けた。そして小舎の中に入つた。小舎には誰も居なかつた。子供等はまた野から歸つて居なかつた。そして女等は家畜を捜して居た。イワンは中へ入つた。そしてベンチに腰を下して考へしつた。

彼は、如何に判決がガヴリロに言ひ渡されたか、如何にガヴリロの顔が蒼くなり、それから仕切の壁の方を向いたか、そんなことを思ひ出した。そして彼の心が重く壓しつけられた。彼は彼自身が答刑を受けんとするその同じ位置に、自分を置いて想像して見た。

さうして彼はガヴリロを憐れ始めた。すると窯爐の上の老父が咳をして、それから彼方此方へ身動きして、兩足を伸ばして、それから下へ匍ひ下りる物音が聞えた。老人は下へ匍ひ下りた。ベンチへ身體を引きづつて行つて腰を下した。ベンチへまで行くのが中々容易でなかつた。彼は咳をし續けた。そして咳の發作が止つた時に、彼は臂を卓子の上に凭らせて、そして言つた。

『どうだ、判決があつたか？』

イワンは言つた。――

『二十打でした』

老人は頭を振つた。

『お前は悪い事をして居るぞ。イワン！ あゝ、非常に善くないことだ！ ガヴリロではなくて、お前に對して、お前は悪いことをして居るんだ。まあ考へて見い、彼の男が背中を鞭たれることを、それがお前に何か利益になるかい？』

『彼奴はそれでもう何もなくなるでせう。』とイワンは言つた。

『何をしなくなると言ふのか？ 何かお前よりもつと悪いことをして居るのか？』

『あなたはどんなことを彼奴が私に對してしたか知りたいですか』とイワンは尋ねた。『あいつはもう少しで嫁を殺す所だつた。そして今も今で、火を放けるなんて嚇しやがつた。それなのに何故私

があいつに謝罪らねばなりませんか？』

老人は長息を洩らした。そして言つた。

『この自由な全世界がお前等の自由になる様に出來て居るのだ。イワン。おれが此の二三年の間かうやつて窯爐の上に寢て居るもんでそれで何かい、お前は何でも見て居るが、おれは何にも見て居らんと思ふのかい？ さうぢやないぞ、えい、お前には全く何も見えな。怒がお前を盲にしたんだ。他人の罪過はお前の前にあるけれどお前自身の罪過は後にあるんだ。お前は彼が悪いといふけれど、もし彼だけが悪い事をするとしたら、此の世に何も罪悪はない筈だ。一體世の中の悪い事といふものは一人の人の爲めに起るものかい？』

喧嘩は二人居なくちや出来ない。お前は彼の罪を見ることが出来るけれど、お前自身の罪を見ることが出来ない。もし彼一人だけが不正な事をして、そしてお前が正しいことをしたのなら、そこに喧嘩が起らなかった筈だ。誰が彼の髯を抜いたか？ 誰が乾草堆を倒したか？ 誰が彼を法廷を引張り歩いたか？ えい？ それにも拘らずお前は何かにつけて彼の男を悪く言ふ！ お前自身の生活方が間違つてる。それが悪るいのだ。お前はそんな風な暮し方をしなかつた。な、おい、おれがお前に教へたのはそんなではない。彼の男の親爺でも、おれでも、そんな暮し方をしたか？ おれ達はどんなにして暮したか？ 仲の善い隣同志として来た。もし隣に餛飩粉が

なくなると、嬢がおれの所へ来て、——「フロル叔父さん、餛飩粉が切れました。」といふ。——「あ、嫁さんか、戸棚にあるから、いくらでも要るだけ持つて行かつしやれの」彼が馬の番するものがない時には、——「ワニアッカ(イワン)、行つて隣の馬を見てやれ」といふ風だつた。それからおれが何でも足らん時には隣へ行つて、——「ゴルヂエー叔父、おれはこれくなもの欲しいんだが」——「持つて行かつしやれ、フロル叔父！」こんな風にしておれ達はやつて来たんだ。そしてお前等もこれと同じ風に工合よくやつて来たんだ。所が今はどうだ？ 此間一人の兵隊がプレヅナのことを話したが、お前等の喧嘩はプレヅナのよりも悪い。これが生活かい？ 罪だ！ お前は

百姓だ、一家の主人だ。お前はそれに對して責任を持たねばなるまい。お前は女子供に何を教へて居るか？ 犬の様に喧嘩することだ！ こないだも、あの鼻垂し小僧のタラスカが自分の母親の前で隣のアリーナに悪口をつけて居た。すると母親は笑つて見て居た。それで善いのか？ お前はその責任を負はねばなるまい。まあ少しお前は靈魂について考へて見い、物事はかういふ風にすべきものか？ お前がおれに一言言ふ。——おれは二言言つて返す。お前はおれを一つ打つ、——おれは二つにして返す。そしたらどうだ、え、おい。キリストは此世を廻つて歩かれた。けれど吾々無智なものにそんなことを教へなかつた。もし誰か一言言つても、黙つて

居れ。するとその男の良心が彼を責めるだらう。これがキリストが吾々に教へた所だ。もし人がお前の頬を打つたら、も一つの頬を出して、「もし値打があつたら、こちらも打て。」と言へ、さうすりやその男の良心がその男を苦しめるだらう。その男は謙遜になつて、そしてお前の言ふべきことをよく聞くであらう。これがキリストが吾々に命じた所で、意地を張るなと仰しやるのだ。何故何とか言はんのか？ おれはお前に道理を語つて居ないか？」

イワンは何事も言はなかつた——彼は聽いて居た。

老人に咳の發作が起つた。一寸痰を吐いて再び語り出した。

『キリストが吾々に教へて下さつたことは悪いことだとお前は思

ふか？ それは吾々の爲めに善い様にと計らつて下さつたんだ。お前の生活を考へて見るが宜い、お前等の間に此の喧嘩が始まつてから、それがお前のために善かつたか悪かつたか？ 一寸勘定して見い、どれだけお前は此の裁判沙汰や、旅費や、食料やなんかで金を無くしたか。お前の息子共は若い鷹の様に成人して居る。お前は此の世は面白く楽しく暮して行ける筈なんだ。ところでお前は有つてるものを失くしてゐる！ そしてそれは何の爲めだ？ みんな何の役にも立たんこつた！ みんなお前の傲慢からだ！ お前は子供等と心を一緒にして、野へ行つて働いて、そして身を樹てねばならないのだ。ところが悪魔にとつつかれて、裁判官か三百代言の所

かへ行きあがる。丁度善い時分に耕やしもせず、善い時分に植付もしない、それで家の小さな地面はよく實らない。何故今年は燕麥がないのだ？ 何時お前は播種いたか？ 何時お前は町から来た！ さうして裁判で何を得了か？ お前は首つたけそれにはまり込んでる！ えい！ 此の馬鹿者！ 早く仕事にかゝれ。子供等と一緒に野にも家にも働け。そしてもし誰れかお前を侮辱したら、そしてたら神の名によつて許してやれ、さうすりやお前はどれだけ善いか知れない。どれだけ氣樂だか知れない。』

イワンは何とも言はなかつた。

『いゝか、ワニア！ おれの言ふことを聽け、おれは老人だからな。』

早く行つて馬の支度をして、もう一度すぐ裁判所へ行つて、告訴を
取り下げて来い、そして明日の朝ガヴリロの許へ行つて神様の名で
謝つて、自家へ招待しろ、——明日は休日だ——（この日は九月の、
丁度聖母マリアの誕生日の前日にあたつて居た）。——茶釜を沸か
して、二度こんなことの起らん様にすつかり罪を潔めろ、そして女
子供にもさうする様に言へ。』

イワンは長大息をついた。そして『爺さんの言ふことは正しい』と
思ふた。彼の心は和いだ。たゞ彼はどう始めて、どう和睦する様に
すべきかを知らなかつた。

そこで老人は、恰もイワンの心の中を讀んだものゝ如く、また言

ひだした。

『進んでやれ、ワニア！ 延して置くな。火がまだ燃えかけの時分
に消して了へ。燃え上つたら、中々消すのが骨だ。』

老人はまだ何か言ひ出しかけた。併し言ひ終はらなかつた。そこ
へ女共が入つて来て、まるで鳥の様にがやく喋舌つたので。凡ての
報知が彼等の耳にすでに入つて居たのであつた。——ガヴリロが答
刑の宣告を受けたこと。彼等の家に放火すると脅かしたことを。彼
等はすつかり聞いて了つて居た。そしてその上に彼等自身で尾緒を
つけ加へた。そして彼等はすでに牧場に居てガヴリロの家の女共と
新しい喧嘩を起して居たのであつた。

彼等は、ガヴリロの嫁が執行官吏を嗾けて彼等を襲はすと脅したといふことを話した。執行官はガヴリロの肩を持つであらう、彼は全事件に反対するであらう。学校の教師も亦た皇帝へ直接にイワシに對する第二の訴状を書き、その訴状の中には、門のこと、庭園のこと、及び農作地の半分は彼等に與へられるべしなど、あらゆることを書き入れた。こんなことを彼等は話し始めたのであつた。

イワンは女共の言ふことを聞いて居て、再び心が酷になつて、ガヴリロと和睦しようといふ考を變へた。

百姓は常にその位置に従つてそれ／＼しなければならぬ多くの仕事を持つて居る。イワンは女共と話して居ないで、立ち上つて小

舎を出て行つた。彼は打穀場へ行き、それから物置へ行つた。彼が仕事を終つて歸つて来る前に、小さな太陽は既に沈んで了つて居た。息子等もまた野から歸つて來た。二人は春の穀物の用意に耕やして居たのであつた。イワンは彼等にその仕事のことを訊いた。彼は手傳つて道具を片附けた。磨り切れた轡を取り外したりした。彼はまたた物置の下に棒や竿を片附けようとしたが、その時はもはや眞暗になつて居た。

イワンは棒竿を翌くる日までそのままにして置いたが、家畜には食物を與へた。彼は出口を開けて、さうしてタラスカに彼の馬を、夜の牧場へ行かせる爲めに往來へ出させた。そして再び出口を締め

て門の板を下した。

『さあ、これで飯を食つて寝るか。』とイワンは思つた。彼が磨り切れた轡を拾ひ上げて小舎へ入つた時に。

この時まで彼はガヴリロのことも、父が彼に言つたこともすつかり忘れて了つて居た。彼が戸の引手を掴んで、玄關へ上る前に、垣の後から隣で誰かを啜がれ聲で罵つて居るのが聞えた。『この爲めにおれは彼奴を悪魔と言ふんだ。』とガヴリロは誰かに呼びかけて叫んだ。

『彼奴生かして置かねえぞ！』

イワンがこんな言葉を聞いた時、隣人に對する以前の憤怒が心中

に燃え上つた。彼は暫く立ち止つて、ガヴリロが罵つて居る間耳傾けた、ガヴリロが静かになつた時、イワンは家の中へ入つた。彼が入つた時、室には火が點いて明るかつた。若い女は片隅に紡車をまはして居た。老いたる女は晩食をこしらへて居た。一番の息子は木履のまはりに巾を纏きつけて居た。二番目の息子は小さな本を持つて卓子の側に腰掛けて居た。タラスカは夜仕事に行きかけて居た。

家の中は、もしこの面倒——悪い隣人のことさへなかつたら、すべてが楽しく快かつたのであらう。

イワンは腹を立て、歸つて來た。ベンチに乗つて居た猫を突き落とし、水溜桶がちやんとしてないといつて女共を叱り散らした。イワ

ンは氣落した様になつた、がつかりと座つて、顔を顰めて、それから轡を修繕し始めた。とガヴリロの言つたことが、法廷で彼を脅かしたこと、たつた今頃がれ聲で誰かに向つて、「あいつ生かして置かねい！」と言つたことなどが、頭へ浮び上つて來るのであつた。

阿母はタラスカの晩食の用意をした。タラスカはそれを食べて、羊の皮のシエビオンカと下衣を着、帯を締めて、パンを少し持つて、そして馬の居る所へ出て行つた。兄が見てやりに行かうと思つて居たが、イワンが立ち上つて、門口の階段へ出て行つた。

もう戸外は眞暗になりかけて居た。雲は空を掩ひ、風が吹き起つた。イワンは階段を下り、息子が馬に乗る手助けして、仔馬に威勢

をつけ、それから暫くそこに立つて、タラスカが村を驅けて行くのや、他の若い衆等と言葉を交すのや、それから彼等がみんなもう聲も聞えなくなる程遠くへ行つて了ふのを見聞して居た。イワンは長い間門の傍に立つて居た。そして、

「彼奴のものは、もつと焼け様が悪るからうせ。」

と言つたガヴリロの言葉が頭から離れなかつた。

「彼奴は我身が可愛とは思ふまい。」とイワンは思つた。「何もかも乾き切つてる。おまけに風がある。彼奴背戸から入つて來て、火を放けさうだ。さうすりやもうお了ひだ。あの悪黨奴が俺のものをすつかり焼いつちまつて、それで捕まらないだらう。今、もしおれが彼

奴を捕まへ得さへしたら、彼奴はさう容易と逃げられまい。」

で彼は歸らないで、真直に往來に出て、そして門の後に隠れようかと思つた。

『いや、家の周囲を廻つて見よう。今時分までに彼奴は何やつてるか分つたものぢやない。』

そこでイワンは門に沿うてそつと這ふ様に行つた。丁度隅を曲つて、垣の方を見た時、何物かその隅へ入り込むのを見た様に思つた。恰も誰かゝその頭を突き出して、そして再び引つ込めたかの様に。

イワンは靜かに立ち止つて息を殺して居た。彼は耳を傾け、眼を見張つた。すべてが靜かであつた。たゞ風が小枝の上の小さな葉を

そよがせ、積んだ麥藁をヒュー！と鳴らして居るばかりであつた。最初は眼を抜き取られた様に、文目も分らぬ程暗かつた。が直に眼はその暗さに慣れた。そしてイワンはその隅全體を見ることが出来た。犁も屋根の傾斜も見えた。彼は暫く立ち止つて、眼を睜つた。併し何物も見られなかつた。

『氣の迷だつたに違ない。』と彼は思つた。『それでも、見廻つて來よう。』

と彼はこつそりと物置に沿うて行つた。イワンは彼自身の足音をも立てないほど靜に這つて行つた。彼はその隅へついて見るとこは如何に！ その真向の端にあつて、何か犁の近くにバツと閃い

て直ぐにまた消えた。イワンはハツと胸が塞つて立ち止つた。彼が止るや否や同じ場所に前よりも強い光が閃き上つた。そして帽子を被つた男が背向に蹲踞んで、手に持つて居た一束の麥藁に火をつけようとして居るのが明かに見えた。

イワンの心臓は胸の中に恰も鳥の羽撃く様に激動し始めた。で彼は自ら勇を鼓し心を緊めて、大股に、而も自分で自分の足音も聞えぬ程、非常に用愼深く進み寄つた。

『そら、今こそ彼奴を捕まへた。現場を取り抑へちやつた。』と自ら言つて。

併しイワンが更に二足と行かぬうちに、突然何物か赫々と輝き上

つた。——赫々と、併し前とは全く違つた場所に。そしてそれはまた決して小さな火ではなかつた。麥藁が庇の下に炎を立て、燃え上つて、母家の方へ擴がり出した。それからガツリロが光の中に立つて居るのが見えた。

雀を狙ふ鷹の様に、イワンはかの跛に飛びついた。

『息の根を止めて呉れう！ こんどは逃げられぬ。』と獨りで言つて、

併し跛はイワンの足音を聞いたに違ない。彼は四邊を見廻して、そして跛にも拘らず脱兎の如く物置に沿うて飛んで行つた。

『逃がすものか！』とイワンは叫んで追つかけた。

併し丁度彼がガヴリロの襟を捉へんとした時、彼はイワンの手の下を潜り出た。でイワンは服の裾を捉へた。裾はちぎれてイワンは倒れた。『助けてくれい！ 捕まへてくれ！』と叫んで彼はまた後追つかけた。

併しイワンが追ひついた時、ガヴリロはもう自分の家へ入つた。イワンはそれでも彼を捕へた。けれども彼がガヴリロを取り抑へようとした時、何物か彼の頭を打つた。恰も石で顛顛を打つたかの様に。それはガヴリロであつた。彼は櫂の棒を取り上げて、そしてイワンが乗りかゝつて來た時、ありたけの力を出して頭を打つたのであつた。

イワンは眼がくらくくとして、すべてが暗くなつた。彼はよろめいて、氣絶して仆れた。

氣がついた時にはガヴリロはもう見えなかつた。晝の様に明るくなつて、彼の家の方にあつて、機關の様に、物が爆發したり人の咆哮する騒ぎが聞えた。イワンは見廻した。そして裏の物置が既に焼け落ちて、横手のが燃え上つて居るのを見た。炎と烟と燃えた麥藁とが母家の方へ吹きやられて居た。

『一體これは何といふことだ？ オーイ！』と彼は手を挙げ腿を叩きながら叫んだ。『庇を引き倒して踏み潰せば宜いんだ。それになんといふことだ。オーイ？』と彼は繰り返した。

彼は聲を揚げて怒鳴らうとした。が、呼吸が出なかつた。聲が咽喉に塞つた。彼は駈け出さうとしたが、足が動かなかつた。踏み外したり躓いたりするのみであつた。彼は單によるめき歩くに過ぎなかつた。再び息が塞つた。彼は瞬時立ち止つて呼吸を入れて、それから再び歩き出した。彼が物置までやつと歩いて行つて、火の側へ行く間に、横手の物置もまた焼け落ちて了つた、母家の隅と門とに火がついて居た。炎は家の中から吹き出した。そして屋敷へ入るとの入口も塞がれて了つた。群集は押し寄せたけれど、何ともせん術がなかつた。隣家の人々は彼等の家財を運び出し、家畜を屋敷の外へ追ひ出してゐた。

イワンの家が焼けた後に、ガヴリロの家に火がついた。風は吹き募つて、火は街を挟んだ向側へついた。村の半ばは烏有に歸して了つた。

ガヴリロの家畜は助かつた。そして家財も少しばかり安全に運び出された。

火は一晚中續いた。イワンは屋敷の側に立つて、眺めて居た。そして、『何といふことだ、オーイ！ 引き倒して踏み潰せば宜いんだ。』と繰り返して言ひくして居た。

併し家の天井が落ちた時に、彼は火の側近く歩み寄つて、燃えた梁を掴まへて、それを引き倒さうとした。女共は彼を見付けて、呼

び返しかけた。が彼は梁を引き出して来て、他のもさうする爲に戻つて行つたが、よろめいて火の中に倒れた。

そこで彼の息子が飛び出して来て、彼を引きづり出した。イワンの髪も髭も燃え、衣服は焦げ、両手に火傷して居た。それでも彼はそれに気がつかなかつた。

『悲しくて氣を喪つたんだ。』と群集は言つた。

火は消えかけた。イワンは尙ほ同じ所に立つて居た。『オーイー！引き倒しさへすりや！』と言ひ續けながら。

朝になつて、村の長老はイワンを呼びに其息子をやつた。

『イワン叔父、お前のお父さんが死にかけて居るよ、お前がお別れ

に来て欲しいつて。』

イワンは父親のことをすつかり忘れて居たので、人が何を言ふのか合點がいかなかつた。

『お父さんつて何だ？ 誰に用があるんだ？』と彼は言つた。

『お前さん お別れに来て欲しいといふのだよ、お父さんは自家に今死にかけてるよ。さあ、一緒に行かう、イワン叔父、』と長老の息子が言つて、イワンの腕を取つた。イワンはその男に従いて行つた。老人が救ひ出された時は、彼は燃え上つてる麥藁に取り巻かれて居た。彼は村で一番端にある長老の宅へ連れて行かれた。その邊は焼けなかつたのだ。

イワンが父親の所へ行つた時、そこには小さな年老の女——長老の妻君——と暖爐の上に幾人かの子供の外に、誰も居なかつた。他の者は残らず火事場へ行つて居た。老人は手に蠟燭を持つて、ベンチの上に横つて、戸口の方を凝視して居た。息子が入つて来たので、彼は立ち上つた。老女は彼の側へ行つて、息子の来たことを知らせた。彼はイワンにもつと側へ来る様に頼んだ。イワンは近寄つた。老人は言つた。

『なあ、イワンや、言はねえことぢやねえ。誰が此村を焼いたか
い？』

『彼奴だ、』とイワンは言つた。『彼奴だ！ このおれが彼奴を見届け

た。おれのこの眼の前で屋根に火をつけあがつた。おらア燃えてる
麥藁の束を引き抜いで、それを踏み消せばよかつたんだ。さうすり
や何事もなかつたんだ。』

『イワン』老人は言つた。『おれの死は来た。お前もまた死なねばな
るまい。それは誰の罪だつた？』

イワンは彼の父を見やつた。そして何も言はなかつた。彼は一語
も發し得なかつた。

『神の前におれに話せ！ 誰の罪であつたか。おれが何とお前に言
つたか？』

此時になつてやつとイワンは我に返つた。そしてすつかり合點が

いつた。彼は鼻をつまらせて、そして言つた。

『私の罪でした。お父さん！』と彼は父の前に跪いて、泣き出した。そして言つた。

『許しておくんなさい、お父さん、私はお父さんにも神様にも罪がありません。』

老人は両腕を振つた。左の手に蠟燭を持ち、右手に彼の額を指した。自分で十字を切らうとしたが、その手を高く上げる力が充分になくて、簡略にした。

『光榮あれ、お、主よ！ おん身に光榮あれ、お、主よ！』と彼は言つた。それから眼を息子に向けた。

『だがワンカ、ワンカ！』

『何です？ お父さん。』

『お前は今どうしなくちやならんか？』

イワンは泣き續けた。

『私は知りません、お父さん。』と彼は言つた。『私達は今どんな風に生きようとして居るのですか？ お父さん。』

老人は眼を閉ぢて、唇を動かした。恰も力を集めようとするかの様に。それから再び眼を見開いて、言つた。

『お前は榮えるだらう！ もし神と共に生活すなら——お前は榮えるだらう。』

老人は口を噤んだ、そして笑つた。そして言つた。

『これ、よく聞け、ワンカ！ 誰が火を放けたか言ふなよ、隣人の罪を隠せ、さうすりや神は二人を許して下さる。』

老人は蠟燭を両手に持つて、その手を胸の上に組み合せ、長大息を吐き、身を伸べ擴げて、そして死んだ。

イワンはガヴリロの所業を公にしなかつたので誰も出火の原因を知るものがなかつた。

さうしてイワンのガヴリロに對する情が柔かになつた。でガヴリロは、イワンが誰にも事實を告げなかつたので驚き異んだ。

最初ガヴリロはイワンを怖れた。が後にそれに慣れて來た。この二人の百姓は喧嘩をしない様になつた。家族同志もまたさうであつた。家を再築する間、兩方の家族が一緒に住まつた。そして村が再び元の通りに直つた時、イワンとガヴリロとは再び一つ巢の中の近隣同志となつた。

かくてイワンとガヴリロとは、以前老人達が暮したと同じ様に、仲の善い近所交際で暮した。イワン・セルバコフは、老人の忠告と火はその最初の中に消し止められねばならんといふ神の證明とを想ひ出した。

さうして、もし誰かが彼に何か害を加へたとしても、彼は決して

意趣返しを企てないで、物事を平和に取りなさうとした。そしてもし誰か彼を悪し様に言つたとしても、彼は言ひ負かさうとはしないで、悪い事を言はない様に相手に教へようとした。かくして彼は家内の女共にも子供等にも教へた。かやうにしてイワン・セルバコフは改めた。そして以前よりは一倍よい生活を始めた。

マルチン

—

或る町にマルチン・アヴデーイチといふ靴屋が住んで居た。彼は地下室の、窓の一つある小さな部屋に居た。窓は街路に向つて居た。窓を通して彼は往來する人々を見守るのを常として居た。たゞ足だけしか見えないのだけれども、彼はその靴によつて人々を見知つた。マルチン・アヴデーイチは長いこと一所に住んで居た。で多くの知

合があつた。此の界限で一度か二度か彼の手にかゝらなかつた靴は殆どない位だ。彼が轉賣したのもあり、補綴したのもあり、縫ひ繕つたのもあり、また中には新しい上皮を被せたのさへもあつた。そして窓を通して彼は屢々彼の仕事を認めるのであつた。

アヴデーイチは仕事で澤山あつた。何となれば彼は忠實な男で、良い材料を使つて、あまり高い手間賃を取らず、そして日限をよく守つたから。もしある時日までに注文を果すことが出来る場合にはそれを引き受けたが、さうでない時にはありのまゝを話して、よい加減な約束をしなかつた。さういふわけで彼はよく人に知られ、決して仕事が無くなるといふことはなかつた。

マルチンはいつでも善い人物であつた。が、老年になつてからは、彼は一層自分の靈魂といふものについて考へ、神に近くことを考へる様になつた。彼の妻は、彼がまだ主人に使はれて居た時に、三つになる男の兒を一人残して死んで了つた。これまでに一人も子供が育たなかつた。みな嬰兒の時に死んだ。マルチンは最初この幼兒を田舎に居る妹の家へ預けようかと思つたが、後でその子を可哀相に想つた。

『幼いカピトシカが知らぬ家に養はれるのは辛らからう。おれは側に置いとかう。』斯う彼は考へた。

さうしてマルチンは主人に暇を貰つて、幼兒と一緒に部屋借をし

たのだ。併し神は彼に子供の幸福を與へなかつた。カピトシカがだんぐ成長して、仕事の手傳が出来る様になり、さうして父親の喜びとなる様になつたと思ふと、病氣に罹つて床に就いた。そして一週間も燃える様な熱に苦しんで、そして死んだ。マルチンは息子を埋めて、それから絶望の淵に沈んだ。彼が神を恨み訴へた程、それほどその絶望が深く大きかつた。マルチンは悲みのあまり、彼も亦死なんことを幾度も神に祈つた。そして年老つた自分を殘して置いて、あんなに愛して居つた一人の息子を奪つたといふので神を非難した。その後マルチンは教會へ行くのを止めた。

或る日マルチンと同じ在所の者で、この八年の間巡禮して歩い

た一人の老人が、トロイワアの修道院からの歸り途にマルチンを訪れて來た。マルチンはその男に胸中を打ち開いてその悲みを訴へた。

『おらアもう生きとりたいたいと思はない。』と彼は言つた。『おらア死にたい。そればつかり祈つとる。もう此の世に何の望みもない人間だ。』

するとその老人は答へた。

『お前さんそんなこと言つちやいけない。マルチン。私達は神様のなさることを審判してはならない。私達の力でなく、神様の意志で世の中はきまるのだ。神様がお前さんの子供が死んで、——お前さ

んが——生きることをお命じになつたのなら、さうなるのが一番いゝのだ。お前さんが絶望するの、——それはお前さんが幸福に生きたいと願ふからして起るのだ。』

『だがその外に何の爲めに生きるのか?』とマルチンは尋ねた。老人は言つた。

『マルチン、神様の爲だ。神様はお前さんに生命を與へて下さつた。それでお前さんは神様の爲に生きねばならぬ。神様の爲に生きる様になると、もう悲しみがなくなつて、何事も安樂に思へるだらう。』

マルチンは暫く黙して居た。やがて尋ねた。『だがどうすりや神様

の爲めに生きられるかい?』

老人は答へた。

『どうすりや神様の爲に生きられるかといふことはキリストが教へて下さつた。お前さん讀めるぢやらう? そんなら聖書を買つて讀みなされ、さうすりやどうして神様の爲に生きられるか分る。すつかりそれに説いてある。』

これらの言葉が、マルチンの心に火を點じた。彼はその同じ日に町へ出て大版の新約全書を買つて來て讀み始めた。

最初彼は休日だけに讀まうと思つて居たが、讀んで行くに従つてそれが彼の心を非常に娛まして、毎日讀む様にした。時々彼はラン

プの油が燃え盡きて了つても、尙ほ聖書を手離し得ない程讀み耽ることともあつた。彼は毎晩讀み續けた。そして讀めば讀むほど明白と神が彼に要求すること、どうすれば神の爲に生きられるかといふことが解つて來た。さうして彼の心がだんく明らくなつて行つた。今まで彼は寢床に就いた時には、いつでも死んだカピトシカのことを思つて、重い心で溜息を吐いたり呻吟したりするのだつた。併し今はたゞ幾度も幾度も、『爾に光榮あれ、爾に光榮あれ、お、神よ！爾の御意志は果されん！』と繰り返すのみであつた。

さうしてその時からマルチンの全生活は變つた。今までは休日には、彼も亦外へ出掛けて酒場などへ入つて、茶を喫んだり、ウオッカ

の一二杯位は拒まなかつた。時には友達などと一杯飲んで、まつたく酔ふといふことはなくても、好い機嫌になつて酒場を出る、そして馬鹿話をしたり、他人のことを喧しく言つたり、悪口言つたりすることがあつた。が今は最うそんな様なことはすつかり爲なくなつた。彼の生活は平和で楽しいものとなつた。朝になるとちつと坐つて仕事にかゝつて、そしてその日の仕事が終わると彼は棚から小さなランプを取り下してそれを卓子の上に置き、棚から聖書を取り出して、それを開いて、そして坐つて讀んだ。讀めば讀むほどその意味がよく解つた。そして益々明かに益々幸福に彼は心の中に感じた。

或時彼は夜更け迄起きて読み耽つて居たことがあつた。彼は路加傳福音書を讀んで居た。そしてその第六章の詩句に讀み來つた。

『人なんちの頬の右方を撃たば、また左方の頬を向けよ。爾の外服を奪らば裏衣をも禁まされ。すべて爾に求めば之を與へ、爾の物を奪らばそれをもまた索むる勿れ。おのれ人に施れんとする事は、また人にもその如く施よ。』

彼は尙ほその詩句を讀んで行つた。神の吾々に告げ給ふ所を。

『爾曹わが言ふことを行はずして、何ぞ我を主よ、主よと稱るや。凡て我に就り我が言を聞きて行ふ者を譬へて爾曹に示さん。その人は家を建るに土を深く掘りて基礎を磐の上に置けるが如し、洪水のとき横流その家を衝つとも動かすこと能はず、是れ基礎を磐の上に置けばなり。聽きて行はざる者は基礎なく、家を土の上に建てたる人の如し。横流之を衝つときはその家たちちに傾れ、其頽壞また甚し。』

マルチンが此等の言葉を讀んだ時、彼の心は喜悅を以て満された。彼は眼鏡を取り外して書物の上に置いた。そして卓子に肘を靠らし、考に耽つた。さうして此等の言葉に照らして自分の生活を考へて見て、獨語を言つた。

『おれの家は磐の上に建つて居るか、又砂の上に建つて居るか？もし磐の上ならば結構だ。一人此所に坐つて居る間は結構だ。人はすべて神の命じた所を爲した様に思ふものだ。併し私が私自身の看守を止るや否や、私は再び罪を犯すのだ。でも私は忍耐しよう、こんなに喜悅が來るのなもの。あゝ主よ、助け給へ！』
かう考へつゝ行つた。そして彼は床に入らうとしたが、書物

と離れるのが嫌に思つた。そこで彼は更に第七章を讀んで行つた。
——かの百人の長のこと、寡婦の子のこと、ヨハネの弟子へのイエスの答などを讀んで、そして最後にある富めるパリサイ人がその家にイエスを請いて共に食せんことを願つたといふ所へ來た。そしてかの罪人であつた女がイエスの足に香膏を塗り、涙で之を洗つたこと、そしてイエスがその女を宥したことを讀んだ。彼は四十四節に讀み來つた。

『遂に婦を顧みてシモンに曰ひけるは、此婦を見るか。我れ爾の家に入るに爾は我足に水を給へず、此婦は涙にて我足を濡ほし首

の髪をもて拭へり。爾は我に口を接せず、此婦は我こゝに入りし時より我足に口を接けて已まず。爾は我首に膏を抹らず、此婦は我足に香膏を抹れり。』

彼は此等の詩句を讀み終へた。そして獨り考へた。

『爾は我足に水を給へず、爾は我に口を接せず、爾は我首に膏を抹らず……』と。

それから彼は再び眼鏡を外して書物の上に置いた。そして再び

考へに耽つた。

『あのバリサイ人はおれの様な男だつたに違ない。おれもまた、おれのことしか考へなかつた。——どうして茶を得ようか、どうして暖かく氣持よくして行つたものかと、そして決してお客のことを考へない。——あの人は自分のことについて考へたが一寸もお客さんのことなんか氣にかけなかつた。そしてそのお客さんは誰だつた？ 主その人だ！ もしおれの所へ見えたとしたなら、おれは同じ様にしたらうか？』

マルチンは兩腕の上に頭を垂れて、自分の寢入つたのにも氣がつかなかつた。

『マルチン！』と突然耳元に響く様な気がした。

マルチンはハッと眠から覺めた。『誰だ？』と彼は訊いた。

彼は四邊を見まはして、戸口の方を見やつた——誰も居ない。

再び彼はとろくとした。と急に、『マルチン！ おいマルチン！

明日往來を見て居れ、予が来るから。』と明瞭聞えた。

マルチンは眼を覺し、椅子から立ち上り、眼を擦つた。併し彼は

この語を夢で聞いたのか、また實際に聞いたのか自分でも分らなかつた。彼はランプを消して、寢床に入つた。

三

翌くる朝マルチンは未明に起きた。そして神に祈を捧げてから、

ストロヴに火を焚きつけ、キャベージの汁と蕎麥粥との支度をした。

それからサモワルに水をさし、前垂を掛けて、窓際に坐つて仕事に

かゝつた。

仕事をして居る間にも、彼は昨日の出來事を考へ考へした。それ

は時には夢の様にも思はれた。またある時はたしかにあの聲を聞い

たと思つた。

『さうだ、そんなことが今のさき起つた。』と彼は思つた。

そこで彼は窓際に坐つて、仕事するよりも往來を眺める方が多かつた。そして、誰でも見慣れない靴を穿いて通ると、足ばかりでな

く、その顔をも見ようと身をかめて外を覗くのであつた。

門番が新しい靴を穿いて通つた。それから水の運搬人が通り去つた。間もなくニコラス帝時代の一人の老兵士が、柔革で縁を取つた甕の古靴を穿いてシャブルを持つて、やつて來た。マルチンはその靴によつて老兵士が誰であるかを知つた。ステバニツチといつて近所の商人が彼を慈悲でその家に置いてやつて居るので、門番の手傳をするのがその仕事であつた。ステバニツチはマルチンの窓の前の雪を掻き寄せ始めた。マルチンは一寸彼を見て、それから自分の仕事にかゝつた。

『ちよつ！ おれは年老つて氣狂になつてゐるに違ない』と言つて彼

は自分を笑つて『ステバニツチは雪除けに來たんだのに、おれはキリストがお出になると思ふなんて。おれは全く氣が狂つてゐる。このおれの老耄め！』と言つたが十針あまりも縫つてから、また窓の外を見ないで置けない様な氣がした。で再び窓を透して見ると、ステバニツチがシャブルに倚つて壁に凭れ、體を温め且つ休めて居た。彼は年老つて衰へ切つて居た。そして最早雪を掻く力すらなかつた。『あの男を呼び入れて、茶を飲ませてやらう。幸ひサモワルが沸いたとこだ』とマルチンは思つた。

彼は靴針を下に置いて立ち上つた。そして卓子の上にサモワルを下して茶を入れた。それから彼は指で窓硝子を叩いた。ステバニツ

チは振り返つて窓側へ來た。マルチンは彼を招いで、自ら戸を開けに行つた。

「入つて、少し温まつたがいよ。お前さん寒いに違あるめい。」と彼は言つた。

「これや有り難てえ。全く骨が痛い。」とステパニツチは答へた。

ステパニツチは入つて來て雪を拂ひ落し、床を汚さない爲に足を拭かうとしたが、よろ／＼と倒れかゝつた。

「足なんか拭かなくなつたつて關はねいよ。俺が床を拭くから、——そんなことは俺等の仕事の中だ。入つて坐りねえ。」とマルチンは言つた。「さあ、茶を一杯飲みねえ。」

マルチンは茶を二杯注いで、一杯を客人に與へた。そして自分のを臺皿の中へあけてそれを吹き始めた。

ステパニツチは飲み干して了つて、コップをうつむけにして、食ひ残りの砂糖の塊をその上に載せ、そして禮を述べ始めた。併しまだもつと欲しいのだといふことは明であつた。「もう一杯。」とマルチンは言つて、自分のと客人のと兩方のコップに注いだ。マルチンは自分の茶を飲みながらも、時々往來に眼を放つた。

「誰かを待つてるのか？」とステパニツチは問うた。

「誰かを待つてるのかつて？ 誰を待つてるのか、それを話すのも變なんだ。まあ、待つても居るし、またさうでもない。だが俺は昨

夜或る事を聞いたのだが、それがどうしても心を離れない。夢だつたのか、それとも何だつたのか分らないのだ。ねえ兄弟、昨夜おれは主キリストの福音を讀んで居た。キリストがどんな難行をなされたか、どんな風に此世を周遊つて歩かれたかといふことをな。恐らくお前さんもそのことについて聞いてるだらう？」

『そりや聞いては居るさ。けれど俺等なんか文盲だから、讀むことは出来ぬい。』とステパニッチは答へた。

『なるほど、が、まあ、おれは丁度そこを讀んで居たんだ。——どんな風にキリストが此世を周遊つて歩かれたかといふことを。すると、そらあの、キリストがパリサイ人の所へ来る。そしてパリサイ人は

善くあしらはなかつたといふ所へ來たんだ。いゝかね、兄弟、おれはそこを讀んで居て、どうしてその人が主キリストを正當な禮を以て迎へなかつたかといふことを考へた。まあかりにかういふことがおれみたいなこんな人間の所で起つたとして見い、おれはどうしてお迎へしていゝかも知らん位だらう。ところがそのパリサイの人は全く何の禮も盡さなかつた。いゝかね！ おれはこんなことを考へてゐるうちに眠つて了つた。と誰かおれの名を呼んでる。おれは起き上つた。するとその聲が、丁度誰か私語く様に、「待つとれ、明日來るぞ！」と言ふのだ。それが二度あつた。いゝかね？ お前さんには本當とは思へまいが、それがおれの心の中に泌み込んだんだ。おれ

は自分で自分を嘲つた——けれど矢張りおれは主キリストを待つて居るんだ。』

ステパニツチは頭を振つた。が、何も言はなかつた。彼は茶を飲み了へて、コップを傍に置いた。がマルチンは再びコップを取り上げて、もう一度それに茶を注いだ。

『さあ、もつと飲んでお呉んねい！それでねい、おれは斯う思つた。彼人は此の世界を歩き廻らつしやつたが、どんな者でも蔑みなさらないで、却つて貧しい賤しい者共の方を餘計相手になさつた。彼方はいつともそんな者共をお訪ねなさつた。そして俺達の様な斯んな罪人の中から、俺達の様な労働者の中からお弟子をお選びになつた。』

「自らを高めんと願ふものは、自らを隕めざるべからず。而して自らを隕しむる者は高めらるべし。」と仰しやつた。「爾等予を主と稱ふ。而して予爾等の足を洗はん。」と仰しやつた。「第一の者とならんと願はんには、彼をしてすべての者の僕たらしめよ。そは貧しきもの、卑しきもの、柔和なるもの、矜恤あるものは福なればなり。」とも仰やつた。』

ステパニツチは茶のとななどを忘れて了つた。彼はもう年を老つて感動し易く涙もろかつた。坐つてぢつと聞いて居ると、涙が頬を傳つて流れた。

『さあ、もつとお茶をお上り』とマルチンは言つたがステパニツチ

は十字の印をして、禮を述べ、コップを倒に伏せて立ち上つた。

『有り難う、マルチン、アヴデーイチ。お前さんはおれを親切に待遇して呉れた。おれの身體も心も慰めて呉れた。』と言つた。『よう来て呉れた。またお出よ。おれはいつまでもお客さんの來るのが嬉しい。』とマルチンは言つた。

ステバニツチは別れて行つた。マルチンはお茶の残りを注いで飲んで了つた。それから茶道具を片附けて再び窓側に坐つて靴をつゝくりにかゝつた。仕事をしながら、絶えず窓の外を視て居た。彼はキリストを待つて居た。キリストのことやキリストの行爲について考へながら。と彼の頭はキリストの言葉で満たされた。

四

二人の軍人が通り過ぎた。一人は官から支給された靴を穿いて居り、一人は彼の作つたものを穿いて居た。それから隣家の主人が光つた木靴を穿いて通つた。それからパン屋が籠を持つて通つた。すべて此等の人々が行つた。そして今度は羊毛の靴下に田舎風の短靴を穿いた一人の女がやつて來た。彼女は窓の側を通つた。そして窓枠の所で立ち止つた。

マルチンは窓から女を見た。見知らぬ、みすばらしい服装の女で、赤兒を抱いて居た。彼女は壁際に、背中を風に向けて立つた、子供

を包まうとして居たが、包むべき何物をも持つて居なかつた。女はぼろ／＼になつた夏服を着て居た。そして窓の内から、マルチンは子供の泣く聲と、それをあやして居るのを聞いた。けれど彼女はあやしきれなかつた。

マルチンは立ち上つて戸口へ行き、階段を上つて、そして言つた。

『ねえさんや、これさ！ねえさんや。』

女はそれを聞きつけて振り向いた。

『何故お前さんは寒いのに子供を抱いて立つてるのだよ、俺の部屋へお入り。暖かいから。もつと工合よく出来るよ。さあ、こちらへ！』

女は吃驚した。彼女は、前垂をかけて、鼻の上に眼鏡をかけた、年老つた年老つた爺さんが自分を呼び込んでゐるのを見た。彼女はあとについて行つた。彼等は階段を下つて室へ入つた。老人は女を自分の床へ連れて行つた。

『さあ、お掛けなされ、姉さん、もつとストロヴの側へ寄つて。暖まつて、小兒に飲ませなさい。』

『飲ませる乳がないのです。妾も朝から何も食へないのです。』と彼女は言つたが、それにも拘らず、彼女は赤兒を胸へ抱きつけた。

マルチンは頭を振つて、食卓へ行つて、パンと皿を持ち出して来た。そして爐の戸を開けて皿の中へ菜汁を注ぎ、粥鍋を取り出

した。が粥はまだ出来て居なかつた。そこで彼は食卓の上に布を擴げて、スープとパンだけを並べた。

『さあ、ねえさん、掛けてお食いなさい。俺が赤兒を見て居てあげよう。なあ、俺も俺の子供を持つてたことがある。子供の扱ひ方は知つてるよ。』

女は十字を切つて食卓に向つて腰かけて、そして食べ始めた。その間マルチンは床の上に赤兒の側に身を置いた。彼は唇で以てチュツ、チュツとやつた。が齒が一本もないので、極くまづい舌鼓であつた。小兒は泣き續けた。とマルチンは彼の指で脅かさうといふ氣になつた。彼は子供のすぐ口の前で指を振り／＼しては、急いでそ

れを引込めた。彼は指を子供の口に當てなかつた。指は黒くて蠟油で汚れて居たので。子供はその指を見て、そしておとなしくなつた。それから笑ひかけた、それでマルチンもまた嬉しかつた。女は食事をしながら、その身の上や、これからの行先やを話した――。

『妾は軍人の妻です。良人がどこか遠くへ送られましたから七ヶ月になります、何の音信もありません。妾は料理人となつて暮して居ましたが、赤兒が生まれましたので、誰も子持の妾を雇つて呉れません。仕事が無くなつて食ふに困る様になつてから、これで三月目です。すつかり食ひ盡して了ひました。乳母になつてみやうかと思いましたが――誰もして呉れ人がありません――あんまり瘦せて窶れて

るといつて。妾は今ある商人のお内儀さんの家へ行つて来たところ
です。そこに妾の知つてる女が奉公して居ますので。其家で妾を使
つてやると約束して呉れました。妾はそれが最後だと思ひました。
けれども次の週から来いと言ふのです。そしてその人の所は大變遠
いのです。妾は疲れきつて了つたし、彼兒も、大事な大事な兒も。
幸なことに、宿のおかみさんが可哀相に思つて、妾達に室を與れ
ました。それでなければ妾はどうしてやつて行けたか分らないの
です。』
マルチンは長太息を吐いた。そして言つた。——「何か暖かい衣服
を持つて居らんのかね？」

「暖かい衣服を着る時節ですのに、あなた、昨日妾はもうそれきりし
かない肩掛を二十コベックで質に入れました。』
女は床の所へ来て子供を取り上げた。マルチンは立ち上つて、仕
切の壁の所へ行つて、何か掻き探して居たが、古い上衣を一枚見
つけた。

『さあ、』と彼は言つた。『これはもうぼろ／＼になつてるが、それで
も何かの役に立つかも知れん。』
女は上衣を見た、そして老人を見た。彼女はそれを受け取つて泣
き出した。マルチンは頭を外向けた。そして床の下へ潜つて小さな
靴を引き出して来た。その中をかき探して居たが、再び女と向ひ合

つて坐つた。

と女は言つた。

『お有り難うございます。お爺さん。妾があなたの窓下へ参りましたのは全くキリストの引合に違ありません。この子供は凍死したかも知れません。妾が出発しました時には暖かでしたが、今はもう寒くなつて了ひました。そして、お爺さん、あなたが窓から覗いて、この哀れな妾を不憫に思つて下さつたのは、キリストがさうおさせなされたのです。』

マルチンは微笑んで言つた。

『全く然うだ、キリストがさうなされたんだよ。私は窓から覗いて

居たが、なあねえさん。ちやんと理由があつたのだよ。』

かう言つてマルチンは女に夢の話をした。あの聲——キリストがその日に訪ねて来ると約束したことを聞いたことを話した。

『何とも言はれません。どんな事でもないとは限りませんから。』と女は言つた。彼女は立ち上つて上衣を着て、その中に子供を包んだ。そして暇を告げて別れる時に、も一度マルチンに禮を述べた。

『これをお持ちなさい。失禮だが肩掛を受出しなさい。』とマルチンは言つて二十コペックの錢を與へた。

彼女は十字の印をした。マルチンも十字の印をして、女と共に戸口へ行つた。

女は行つて了つた。そこでマルチンは菜汁を食べて、皿を洗つて、それから再び仕事についた。仕事をしながらも彼はなほ窓を忘れなかつた。窓が暗くなると、直様、誰が通つて居るか頭を上げた。知人も通つた、知らぬ人も通つた。併し別段これといふほどの者は通らなかつた。

五

ところが今度は年老の林檎賣の女が窓の前に立止つたのを見た、彼女は林檎を入た籠を持つて居た。がその中には少しばかりしか残つて居なかつた。きつと大概賣つて了つたのだ。そして木片を一杯

入れた袋を肩に擔いで居た。何處か新しい家を建てゝる所で拾ひ集めたに相違ない。そして今家へ歸る所なのだ。袋はたしかに重いと云ふことは誰の眼にも見えた。彼女はそれを一方の肩へ擔い換へようとした、そこで彼女は袋を足元へ下し、林檎の籠を一方に置いて、袋の中の木片を揺すぶつた。袋を揺すぶつてる間に、破れた帽子を被つた小さい男の兒がやつて來たが、籠から林檎を一つつまみ取つて、逃げて行かうとした。ところが婆さんがそれを氣付いて、振り返つてその子供の袖を捉へた。子供はもがきだして、ふり切つて行かうとしたけれども、婆さんが兩手でつかまへて、その帽子を叩き落して、そして子供の髪毛をつかまへた。

子供は泣き叫んで居た。婆さんは罵り喚いて居た。マルチンは靴縫針を、もとの所に置く暇もなく、それを床の上に打捨つといて戸口へ飛んで行つた。——急いで階段に躓いて、眼鏡を落しさへして——そして往來に飛び出した。

婆さんは子供の髪の毛を引つ張つて居た。悪體を言つて、交番へ連れて行くと脅かして居た。少年は身を防ぎながら、罪を否認して居た。

『おれは取らない、なせおれを打擲るんだい？ 放せ！』と言つた。

マルチンは彼等を引き分けようとした、彼は少年の腕をつかまへ

て言つた。

『放してやつて呉れ、お婆さん、許してやつて呉れ、お願いだから。』

『こいつが一年の間忘れん様にして許してやるわい。この小僧奴を警察へ連れて行くのぢや。』

マルチンは婆さんにしきりに頼んだ。

『放してやつて呉れ、お婆さん、もう二度としないから、放してやつて呉れ、お願いだから。』と彼は言つた。

婆さんは手を緩めた。少年は走り出さうとした。がマルチンは引き止めた。

『お婆さんに謝罪ろ。そしてもう二度とこんなことはならんぞ。』

おれはお前が林檎を取つたのを見た。』

少年は泣き出した。そして謝罪りだした。

『さうく！ それで可い。さあお前に林檎を呉れるぞ。』

とマルチンは籠から林檎を一つ取り出してそれを少年に與へた。

『おれがお錢を拂ふよ、お婆さん。』と婆さんに言つた。

『お前さんはそんなこととして餓鬼共を悪くするんだよ、この無益小僧共を。此奴は一週間でも此事を忘れん様に懲らしてやらねばならん奴だ。』と婆さんが言つた。

『おい、お婆さん、お婆さん、』とマルチンは言つた。『それは俺達の判断では正しいけれど、神様の判断ではさうではないよ、もしこの兒

が林檎一つで殴られるものとしたら、おれ達は、おれ達の罪に對して何うされたら可いんだらう？』

婆さんは黙つて居た。

マルチンは縦喩——主人がその従僕にその莫大な債務をすつかり許してやつた、そして従僕は貸手の咽喉を締めようとして出て行つたといふ話をした。

老婆は耳を傾けて聞いて居た。子供も亦た側に立つて聞いて居た。

『神様は吾々に赦す様にお命じになつた。』とマルチンは言つた。『さうでなければ吾々も亦た赦されないだらう。すべての人を赦さねば

ならぬ、思慮のないものは尙更のこと。」

老婆は頭を振つて、そして溜息を吐いた。

『それは然だ。』と彼女は言つた。『けれどもあんまり性根が悪くなつてるのが困りもんだよ。』

『それなら、吾々年老が教へてやらねばならん。』とマルチンは言つた。

『わたしの言ふのはそれだよ。』と老婆は言つた。『わたしは七人子供を持つて居たが——たつた娘が一人しか残らなんだ。』

それから老婆は、何處に如何して娘と住んで居ること、孫が幾人あることなどを話しかけた。『もう今では、わたしも力がほんの少し

しなくなつた。けれども矢張働かねばならん。わたしは子どもが可哀相で——孫共が——だが何といふ善い兒どもだらう！ 誰もあ

の兒ども等みたいにわたしに善くして呉れるものがない。』

『小さなアンニイはわたしの外に誰の所へも行かない。』お婆ちやんお婆ちやん、可愛いお婆ちやん」つて、

かう言つて老婆は全く感傷的になつた。

『尤も、これはほんの子供の悪戯だつたのだ。』と彼女はかの少年を指して言つた。

老婆は將に袋を擔がうとした。その時少年は走つて行つて、

『それわしが持つて行つて上げよう、お婆さん、途中だから。』と言

つた。

老婆は點頭いて、袋を少年の背中に載せた。そして彼等は並んで歩いて行つた。

老婆はマルチンに林檎の代を請求することさへ忘れた。マルチンは身動きもせず、ちつと彼等を見送つて居た。そして彼は彼等が歩きながら途々話して居るのを聞いた。彼等の姿が見えなくなつてから、マルチンは部屋へ歸つた。眼鏡が階段の上に落ちて居るのを見付けた。——眼鏡は破れて居なかつた。彼は靴縫針を拾つて、再び仕事にかゝつた。

暫く仕事をして居ると、だんく暗くなつて、もう縫目も分らぬ

程になつた。點燈夫が街燈を點けに歩いて居るのに氣がついた。

『あかりを點ける時分だな。』とひとりで言つた。そこで彼は小さな洋燈を用意して、それを吊した。そしてまた仕事についた。彼はもう片方の靴を終へた。彼はそれを引つくり返して、暫らく見て、『よく出来た。』といつた。彼は道具を片付け、切片を箒き、刺毛や屑を拂ひ、洋燈を取つて卓子に据ゑた。そして棚から聖書を取り出した。彼は昨日皮切をしるしに入れて置いた丁度そこを開かうとした。が偶然他の所が開いた。それを開いた瞬間、彼は昨夜の夢を思ひ出した。そしてそれを思ひ出すや否や、まるで誰か自分の後を歩いてる足音が聞える様だつた。マルチンは見まはした。と、そこに——暗

い隅に、恰も人々が立つて居るかと思はれた。彼はその誰であるかを知るに困んだ。さうして彼の耳に私語く聲があつた。

『マルチン——おい、マルチン！ お前はおれが分らなかつたか？』

『誰だ？』 マルチンは叫んだ。

『おれだ！』 聲が繰り返した。『おれだつたよ。』とステパニツチが暗い隅から進み出た。彼は微笑んだ。そして小さな雲の様に薄れて、すぐ消え去つた。

『それから私でしたよ。』と聲が言つた。

暗い隅から子供を抱へた女が進み出て來た。彼女は微笑んだ。子供は笑つた。そして彼等も亦た消え去つた。

『それから私でしたよ。』と聲が續いた。老婆と林檎を持つた少年とが進み出た。二人共微笑んで消え去つた。

マルチンは靈に喜悅を感じた。彼は十字を切つて、眼鏡をかけて、偶然開いた所の福音を読み始めた。その頁の上部を次の様に讀んだ。

『そは汝等我が飢し時われに食はせ、渴きし時我に飲ませ、旅せし時われを宿らせ、……』

それから同じ頁の下の方で斯う讀んだ。

『爾曹わが此兄弟の最と微き者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり。』

そしてマルチンは彼の夢が彼を欺かなかつたことをさとつた。救世主が本當にその日彼を訪れたこと、それから彼が本當にそれを歡び迎へたことが解つた。

人と土地

或る女が田舎の妹を訪れる爲めに町から來た。姉は町の商人の妻で、妹は百姓の妻であつた。二人の姉妹は一緒に茶を飲みながら話し合つた。姉の方は自慢を始めた——町に於ける彼女の生活、廣々とした家に優美に暮して居ると、馬を持つて居ること、子供の着物のこと、美味しいものを飲んだり食つたりすること、馬車や徒歩で

散策に出ること、それから芝居に行くことなどを賞めだした。

妹は侮辱された様に感じた。そして商人の生活を賤しんで、彼女

自身の生活——百姓の生活の辯護をし始めた。

『妾は妾の生活とお前さんのと取りかへたかない。』と妹は言ふ。『なるほど妾達は卑しい生活をして居てもね、何にも恐いことなんぞ知らないんだからね。お前さんはずつと立派な生活をして居るさ、だが澤山賣らねばならぬ。でなけりやお前さん自身までも全く賣られて居る様なこともあるからね。譬へにも言ふぢやないか「損は得の大きな兄弟」だつて。今日お前さんが金持でも明日になれば軒下に立つ様なことも起るんさ。けれども吾々百姓になるともつと氣強

いからね。百姓の生活はそりや細いが長いよ。妾達は有福でないかも知れないが、それで充分なんだよ。』

姉は言ひ出した——。

『もう澤山、——まあさうだらうさ！ 豚や犢牛だつて其の通さ！ 綺麗な着物一枚なし、面白い交際社會もない。なんだつて御亭主が稼ぐんだ！ なんでお前は豚小舎みたいな家に住んでるんだ！ さうやつてお前達が死んで了ふ。子供等もやつぱり其の通りだらう。』

『さうよ。』と妹は言つた。『妾達の仕事は正しいのだ、妾達は安樂に暮して居ます。誰にも頭を下げはしない。誰にも恐がることとはないんだ。けれどもお前さん等町の人間は、皆な誘惑の真中に住んで居

るんだ。今日はまア都合がよいとしても、明日になると誰か變な奴が来てお前さんを誘惑する、お前さんの亭主を賭博とか酒とか女とか言ふもんで誘惑する。さうして何にもかも無茶苦茶になつて了ふ。さうぢやないか？」

妹の亭主のバコームは、二人の姉妹が言ひ争つて居るのを、煖爐の上で聽いて居た。

『本當だ、』と彼は言ふ。『全く其の通りだ。俺百姓等が子供の時分から生れた土地を掘り返して居て離れない様に、愚な考も頭の中に止つて居て、出て行かないのだ。たゞ一つ氣になることは——土地が少しかないといふことだ。もし俺が好きだけ土地を持つて居

さへすれば、それでもう誰も恐かない——悪魔だつても。』

女共は茶を飲み終へて、それから尙ほ衣服のことなど話し、食事を終へて床に就いた。

併し悪魔は煖爐の後ろに坐つて居た。彼は話をすつかり聽いた。百姓の妻君が亭主までも引き込んで自慢させたので、悪魔は喜んだ。亭主はもし充分土地を持てば、悪魔なんかに負けないと自慢した。

『よし、お前と俺と一つ戦つてみよう、俺はお前に土地を與へよう、土地で往生させてやらう。』斯う悪魔は考へた。

その百姓の隣に一人の貴婦人が住んで居た。彼女は百二十露町歩の土地を所有して居た。そして百姓達とは仲よく暮して、決して彼等を苛めることなどはなかつた。所が退職の軍人が、その管理人となつて來てから、罰金で彼等を困しめる様になつた。どんなにバコームが注意しても、彼の飼馬が燕麦を踏みにじるか、或は牛が庭園の中へ入るか、或は犢が牧場へ入るかした。すると何でもそれに対して罰金を課せられた。

バコームは罰金を支拂つた。そして家内の者を叱り散らしたり、打擲したりした。夏の間にはバコームは此の管理人のお蔭で多くの罪におとされた。けれども尙ほ彼はその屋敷内に家畜を飼つてゐることを喜んで居た。糧秣が充分なくても彼は一寸も意に介しなかつた。

冬の間、隣の婦人が土地を賣るといふ噂がひろがつた。そして或人がもうそれを買ふ準備をしたといふ噂も立つた。

百姓等はそれを聞いて、そして嘆いた。

『さあ、土地が人手に渡つて了ふ。其人は必然今迄より餘計に罰金を取るだらう、此の土地がなくては暮して行けない、此の界限の者はみんなこの土地で食つて居るのだ。』と彼等は思つた。

そこで百姓等は一團體を作つて其の婦人の許へ行つて、他に賣らないで、彼等に有たして呉れと頼んだ。彼等はもつと高い代價を拂ふことを約束した。

その女は承知した。百姓等は其土地をすつかり仲間で買ふ準備しようとした。一度、二度彼等は寄り集つた。併しそこに故障があつた。意地悪い男が皆を争はせたので、彼等は全然一致することが出来なかつた。

そこで百姓等は、別々に自分の力次第で其の土地を買ふことに決した。婦人はそれにも亦た同意した。パゴームは、近所のある男が二十露町歩の其の土地を買ひ、其代價の半分は一年後に拂ふことを

その女が承知したことを聞いた。パゴームは美しく思つた。

『皆してすつかり買つて了つて、おれは一番最後に残るんだ。』彼は獨語した。彼は妻に相談を始めた。

『他人はみんな買つてる。』彼は言つた。『おれらも亦た十露町歩ばかりも買はねばならぬ。さうしなけりや食つて行けない。管理人は罰金で俺等を食ひ盡しとる。』

彼等はどうして買はうかと其の計畫を立てた。百ルーブルの貯金があつた。そこで彼等は一疋の仔馬と養つて居た蜜蜂の半分を賣り、息子を労働に出し、それからまた幾らかを義理の兄弟から借りた。かうして代金の半分を集めた。

バコームは金を集めて、森のある土地を十五露町步選んで、そして其婦人の許へ買ひに行つた。彼は思ひ通りの買入方を申込んだ。相談が調つて手附金を拂つた。彼等は町へ行つて登記をした。彼は半額だけ支拂つた。残金は二年の中に拂はねばならぬのであつた。さてバコームは今や自分の土地を得た。彼は買つた土地に種を蒔き、植付をした。僅か一年の中に彼は残金を支拂ひ、且つ義兄にも負債を返却した。さうしてバコームは地主となつた。彼は彼の土地をすつかり耕して種を蒔いた。自分の持地で枯草を得た。自分の持地に杭を打つて圍をこしらへた。そして自分の持地の内で家畜を養つた。バコームは彼の廣き田野を耕し廻つたり、或時は其の收穫を

考へたり、ちつと牧場を眺めたりするを常として居た。がまだ彼は幸福ではなかつた。何だか草が荒れて来る様に思はれ、其の中に咲いて居る花が全く違つて来た様に思はれた。以前彼は此の土地を唯だ土地として扱つて居た。が併し今は土地は全く特別なものである様になつて来た。

三

かうしてバコームは日を送つた、そして喜んで居た。すべてのことが都合よく行つたのであるが、たゞ百姓等が穀物の上や牧場の中へ踏み込んで来かゝつた。彼はそれを憤む様に頼んだが彼等是一向

止めなかつた。或時は牛追の子供が牧場へ牛を連れ込み、或時は馬が夜番の眼を盗んで穀物畑へ入つて來た。

パコームは彼等を追ひ出した。そして許してやつて、決して訴へなどしなかつた。其後彼は最早それに飽きて訴へた。そして彼は百姓等が決して悪意からでなく、不注意からしたのだといふことを知つて居たが、彼は自ら言つた。

『見遁しして置けない、さうでなけりや奴等は何時でも彼所で奴等の家畜を飼ふ様になる。一度懲らさねばならない。』

かうして彼は一度法廷で彼等を懲らした。二度懲らした。一度は一人に罰金を課した。次には他の一人に。パコームの近所の百姓等

は彼に對して憎惡を抱く様になつた。彼等はまた／＼彼の土地へ踏み込み始めた。そして今度は故意にやつた。或者は夜彼の所有の森の中へ入つた。彼等は薙を作る爲めにリンデンの樹を二三本も伐つた。パコームは森へ行つて、この有様を見て顔を蒼くした。誰か其處に居つたのだ。リンデンの樹の枝がそこゝに散らばつて、切り株がそこに立つて居た。灌木の茂がすつかり伐り倒されて了つて居た。悪者がそれを綺麗に掃除した様にしてあつた。たつた一本残つて立つて居た。

パコームは腹が立つて來た。『畜生！』と彼は獨語を言つた。『ほんとに誰奴がしたか分つたが最後、其儘には置かねい！』

彼は考へ又考へた。『一體誰奴だらう？』

『セメカの野郎より外に誰もさうな奴は居ない。』と獨言した。

彼はセメカの家へ探りに行つた。が何事も見出せなかつた。彼等はたゞ喧嘩言葉を交して居るのみだつた。而も尙ほバコームは矢張セメカの仕業だと益々確信した。彼は入つて行つてセメカに苦情を言つた。彼等は之を裁判へ持ち出して長い間争つた。百姓は訴訟に勝つた。それは證據が不充分であつたからだ。バコームは益々激昂した。彼は裁判官等にまで食つて掛つた。

『手前等も盜賊の仲間だ。手前達が若し正しい人間なら盜賊に勝たしやしない。』

バコームは裁判官と近所の人々と兩方と喧嘩した。彼等は彼に或る罪を以て嚇しさへし始めた。バコームは更に廣い田地を所有する様になつて居たが、仲間中では、一層多く確執を以て暮した。

此時分人々は新しい場所へ移つて行かうとして居るといふ噂が立つた。そこでバコームは自ら言つた。

『己には此土地から離れて行く理由はない。だがもし近所の誰かや行くとすりや、己等の土地はもつと廣くなるといふもんだ。己は彼等の土地を手に入れることになる。こゝら中は己が有つ様になる。さうすりや、生活がすつとよくならう、今はあんまり狭過ぎるから。』

或時バコームが家に居ると、一人の百姓が漂浪つて來た。彼は其

百姓を家に泊らせ、食物を興へた。彼等は話し始めた。

『一體お前さんは何處へ行くんだ？』

百姓は今迄ヴォルガ河に仕事をして居たが、今度歸るのだと話した。百姓はヴォルガ河の附近に出稼に行つてゐる人々の模様と言ひ及んだ。其處には人々が皆な移住して居ること、一部落を作つて居ること、それから一人について十デシヤチンスからの土地を貰つて居ることなどを語つた。『所がその土地といふのがらい麥の出来る様なんでね。その莖つたら——滅多に見られねい。滅法太いんでさ！五ツ掴で一束になる位でさ。』と言つた。また、『或る男なんざア、それこそ恐ろしく貧乏だつたが——空手でやつて来て——さうして今

ちや馬が六頭に牛の二頭も飼つてまさあ。』と話した。

バコームの心は燃え立つた。彼は自ら言つた。『何故こんな狭苦しい所に愚圖ついで居るんだ、樂に住める所があるのに？ 此處の家も土地も賣つて了はう、それから其の金を持つて新しく出直して、そして完全な經營をやらう。併し此處の狭い所に——それは罪だ。さうだ、己はたゞ己れだけ行つて見つけ出さねばならぬ。』

彼は夏中行て居ようと計畫して出發した。サマラから汽船に乗つてヴォルガ河を下り、それから尙ほ四百ヴェルストも徒歩で歩いた。彼は目的の場所へ着いた。それは話の通りであつた。百姓等は各自に十デシヤチンスの土地を貰つて廣々と暮して居る。バコームが行

くと彼等は其仲間に加はることを喜んだ。

『誰でも少し金を持つてる者は、割當の土地の外に、何處でも欲しい所をどれだけでも三ルーブルで買ふことが出来る。お前さんも買ひたけりや幾らでもいゝ。』と彼に言つた。

バコームは充分調査をして、秋になつて一旦家に歸り、そしてすべてのものを賣り拂ふ手順をした。所有地が具合よく賣れた。家も賣つた。家畜も皆な賣つた。其部落の團體から自分の名を除いた。春まで待つて、それから一家を率ゐて新しい土地へ移つて行つた。

四

バコームは家族と共に新しい土地へ來て、大きな村の住人として籍を入れた。村の長老達に酒の御馳走をしたり、證書や書類の整理をもした。バコームは歓迎され、家族五人の分として五十デシヤチンスの土地を各々異なつた所を見定めて割り與へられた。その外に牧場も貰つた。バコームは居付いた。家畜を手に入れた。彼は以前所有して居たよりも三倍の土地を得たのであつた。そして土地は豊饒であつた。生活は今迄よりも十倍も善くなつた。彼は必要なだけ耕作に適する土地と糧秣とを得るやうになつた。好きなだけの家畜を飼ふことも出来た。

最初、其處に居付いて、家の整理をして居た間は、彼は何事も愉

快であつた。が心が落着いて來ると、此の農場さへ彼には寧ろ狭い様に思はれた。

初めの年彼はそのあてがはれた土地に小麦を蒔いた。それはよく實つた。で彼は小麦を蒔かうと欲した。けれどもその土地は彼の野心を充たすには全くあまり小さい様に思はれた。

小麦は休閒地に蒔くのである。で人々は一年か二年小麦を蒔いてそれから羽毛草が生えるまで土地を休ませて置くのである。斯様な土地を得ようとする多くの競争者があり、中々思ふ様に當らないのである。

さういふことの爲めにまた喧嘩が起るのであつた。一方は他の一

方よりも富んで居た。彼等は皆其土地を得て蒔かうと欲した。けれど結局貧しい方は商人の所に借地を頼みに行かねばならなかつた。

パコームは出来るだけ多く種を蒔かうと欲した。翌くる年彼は或る商人の所へ行つて一年間の約束で土地を借りた。彼は多く植付けた。大變工合がよかつたが、そこは村から大變離れて居て十五ヴェルストも歩いて行かねばならなかつた。彼は耕奴商人等が如何に立派な家に住み、そして如何に有福であるかを見知つた。

『さうだ、もし己れは土地が買へさへすりや、さうすりや己は立派な家を持てるんだ。それは一仕事だらう。』と彼は獨語つた。

そこでパコームは如何にして永久の地権が得られるかと思案し始

めた。

斯くしてバコームは三年を暮した。彼は土地を借りてだんく多くの小麦を作つた。年々工合がよくて小麦はよく出来た。餘分の金を貯蓄した。

年が経つにつれて、バコームは他人と一緒に土地を買ひ、其の爲めに時間をつぶしたりするのが一年々々懶く焦れつたくなつて来た。少し宜さそうな土地があると、百姓等は絶えず我れ勝ちにとそこへ飛んで行つて、それを分けるのであつた。バコームはいつもあまり後れて行つては安く買ふことが出来ず、少しも種蒔が出来なかつた。

併し三年目になつて彼は一人の商人と仲間で百姓から牧場を買入れた。そして彼等は既にそこを耕して了つた。所が賣つた百姓はこの事で法律に問はれて居た。そんなことで折角の仕事も駄目になつた。『己は土地が自分のものになりや、誰にもへいしくしなくてもいいんだのに。』と彼は考へた。

そこで彼は何處かに永代権を得られる土地はないかと尋ねだした。彼は一人の百姓を探し當てた。その百姓は五百デシヤチンスの賣物の土地を持つて居た。其男はそれを手放したいので、安くても賣らうといふことであつた。

バコームは其百姓と掛合を始めた。彼等は種々と掛合つた結果、

千五百ルーブルで賣ることに承諾した。其半金は抵當を入れて借りるといふことであつた。彼等は今既すでに相談を纏めて了つた。其時一人の旅商人たびあきうどが通りかゝつた。そしてバコームに少しばかりの食を乞ふた。

茶を一杯飲んで居るうちに、彼等は世間話に入つた。

旅商人は遠いバシユキル地方から來た話をした。「そこで」と彼は言つた。「私はバシユキル人から千五百デシヤチンスの土地を買ひましたが、たつた千ルーブルしか拂はんかつた。」

バコームは種々のことを尋ねた。旅商人はそれについて物語つた。「私のやつたことは皆な年老の機嫌を取ることでしたよ、百ルーブ

ル位の値の毛氈と、其上に茶を一箱やりましてね、それから飲む連中に少しばかり飲ましてやつたんです。そして一デシヤチンスについて甘コベツクで手に入れたんですよ。——彼は地券を示し、——『小さな川の側にあつて、一面にいゝ草が生えてゐますよ。』

バコームは尙ほ種々のことを尋ねた。どうして誰が處理したか、といふ様なことを。

『其邊はまア、』と商人は言つた。「一年中掛つて歩いても廻りきれません。——みなバシユキル人ばかりですよ。そして皆な驢馬の様な鈍間ばかりだから、本當にロハで買ふ様なものでさ。」

『ふむ、なんで己れは五百デシヤチンスばかりの土地に千ルーブ

も使ふことがあるものか、おまけに大きな借金までして。そこへ行
けや、本當に千ルーブルもありやどんなに買へるか知れない！」と
バコームは獨語つた。

五

バコームは如何してその男が其處へ行つたかといふことを聞
た。そして旅商人に別を告げるや否や、彼はそこへ行かうと決心し
た。家を妻に任して置いて、下男を連れて出發した。町へ着いて茶
や酒や其他の土産物など、旅商人の言つた通りのものを買つた。彼
等は旅に旅を重ねて、五百ヴェルストも旅した。七日目にバシユキ

ル人の放浪して歩く區域まで來た。とすべてがかかの旅商人の言つ
た通りであつた。人々は曠野の中に、小川に沿うてフェルトと言ふ
毛氈で天幕を作つて住んで居た。彼等は自ら耕しもせず、またパン
も食べない。牛は自由に曠野に放たれ、馬はぞろぞろと群をなし
て歩いて居る。天幕の後には仔馬が繋がれて居て、一日に二度宛牝
馬をそこへ連れて來る。彼等は牝馬の乳を搾つてそれで常用飲料の
馬乳酒を作る。女共は其馬乳の脂肪を取つてチーズを製へる。そこ
でこれらの農民の出來ることは何かといふと、馬乳酒と茶を飲むこ
と、羊肉を食ふこと、草笛を鳴らすことしかない。皆おとなし
く樂しげに夏中お祝をして居る。色は非常に黒くて、ロシア語を話

せないが、愛想がよい。

バシユキル人がバコームを見るや否や、天幕から出て来て、彼を取り巻いた。通辯が彼と知合になつた。バコームは、彼が今度土地を見に来たことを話した。バシユキルの人々は喜んで、天幕の中へ案内した。蓆を敷き座布團を與へて、其周圍に彼等は座つた。そして彼等は茶と馬乳酒の御馳走をし始めた。羊を屠つて其肉を饗應した。

バコームは馬車の中から土産物を取り出して来た。それを分配し始めた。

彼は皆に土産物を贈り、茶を分けた。彼等は大に喜び、異口同音

に口早に喋舌つた。それから通辯に話をする様に命じた。

『皆斯う言つとりまします。』と通辯は言ふ。『皆なあなたを好いてゐます。私達はお客様に満足を與へる爲めに何でも出来るだけのことをして、そしてお客様のお土産に御返禮する習慣がある。あなたは私達に土産物を下さつた。ですから何卒私達の持つて居るもの、中で何でもお望みのものを仰しやつて下さい。私達はそれをあなたに差上げませう。』

『何よりも、私は』とバコームは言ふ。『私はあなた方の土地を幾らか欲しいんです。私の地方では土地が、極く少いのです。それともうすつかり耕し盡されてゐるんです。所があなた方は大變有つて居ら